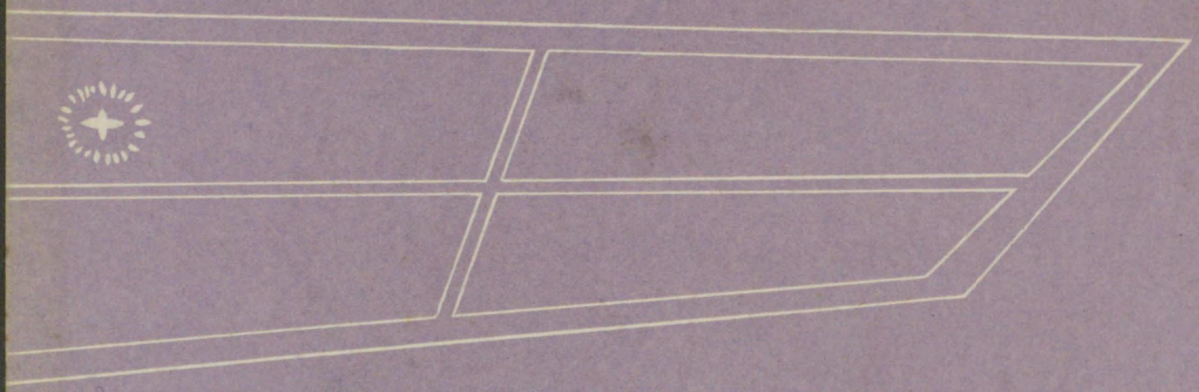
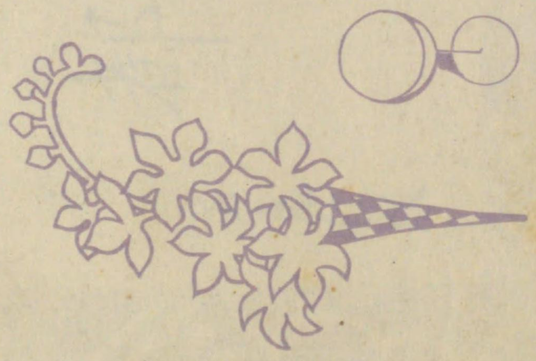
603-186
1200701473304





貯金

妖都

三上於菟吉著

平凡社版

妖都　　丸尾至陽筆

603-186

妖都　　丸尾至陽筆

603-186

I種
W

1200701473304

目次

妖都……一
火刑（篇後）……四九七

口絵　丸尾至陽
装幀　丸尾至陽

妖

都

銀座の夜

1

呉芝清は、黄金いろや紅や青の光彩の環が、ぐる〳〵と回轉してゐるのを見つめてゐるうちに、だん〳〵自分の全身がその渦巻きに巻き込まれてしまうやうな氣がして、一生懸命それに反抗してゐるうちに、途方もなく激しいひゞきに耳を打たれて、ハツとして目を醒ました。かれはびつくりして、赤濁つた目であたりを見まはした……

やゝ、離れたテーブルに坐つてゐた泥酔漢が、何かに癇を立てゝ、皿かグラスを床にたゝき落とした音だつた。その騒ぎは女給たちの取りなしですぐに收まつた。

清ははじめて自分が眠るべからざるところで眠つてしまつてゐたのを發見した。あまり飲けないかれは、先輩連と一緒にこのカフエ女虎の二階のボツクスに坐つてゐるうちに騒いで三四杯のウイスキーを干して、そしてあらがひ難い酔を感じて、白いテーブルに突伏して眠つてし

まつたのだつた。

呉芝清はこの一座では一ばん年少でもあつたし、またこの中のある者とは師弟の情誼さへ擔つてゐた。かれは今何やら甲の高い調子で、隣席の男としやべつてゐる藤島三吉の方へチラリと目を送つた……

かれは、かれが先生と呼んでゐる藤島の神經質と癖癖とをよく知つてゐた。しかし、幸ひに藤島はこちらを見てゐなかつた。清はホツとした。事實、藤島といふ人物は、今や現にさうである通り、交友の間にゐるとひどく快活で明るかつた。どんなことでも笑つてよろこばしげだつた。世間では藤島を出鱈目な饒舌家、樂天的浮氣者として數へてゐたが、清だけはかれの內心の傾向に氣がつき切つてゐるのだつた。世の中であんなに笑ひ興じてゐる男が、書齋で一人ぼつちで坐つてゐる時には、鬱陶しげな目付をして、眉根を寄せ合せてゐた。そして口の中で唸つてゐることさへあつた——

『畜生——、畜生——、』

——この人は、こんな時は、何を罵り呪つてゐるのだらう——

この人は一人でゐる時には見えない敵と戰つてゐるのだ——さう思ふと頭髪をもぢや〳〵にした先輩の後すがたに不思議なおそろしさをさへ感じるのだつた。

藤島三吉は、しかし、こんな派手な場所へ來ると、傍若無人をきはめてゐた。大聲で笑ひ、勝手なことをしやべつて女給たちを相手に腰に腕をまはしたり、手首に大ツぴらに接吻したりしてはゞからないのだつた。清はぢつと藤島をみつゞけてゐた。

——師匠はどうしてあんな精力を持つてゐるのだらう？

清は嘆息せざるを得なかつた。藤島は學校生活を放埒で汚してしまつてからいかなる黨派にも團體にも屬せず、勝手氣まゝに文學的經路を歩いて來て、いつの間にか世間大衆のひいきを受けて、今では可成な愛讀者團を有してゐた。で、誰に遠慮もない我まゝな暮らしをつゞけてゐたが、それを掣肘するものはなかつた。

——僕は師匠の文學をちつとも尊敬してゐやしない。先生の精力を感心してゐるだけなのだ。

清はむしろ藤島の元氣一方なすがたを見るのが憎らしかつた。

『女なんか僕たちと相對の存在ぢやないんだよ。あんなものは——』

藤島は例によつて大聲でしやべつてゐた。かれの女性罵倒は有名だつた——

——藤島は醉ひゆがんだ樣な顏に、淫らな微笑をみなぎらして、となりに坐つた佐藤といふ頭髪を額に亂した男と甲高な調子でしやべつてゐた。

『責任を取るといふことは一切の實際生活には必要なものさ。しかし女に關しては、そんな氣持ほど不必要なものはないんだ。兩性生活には快樂だけが問題だ。それつきりだ。何もありはしないさ』

『しかし君の方針は隨分恬淡すぎるなァ――君はいつたい女にほれるといふことが無いのかい？』

佐藤は訊ねた。佐藤は藤島たちの群へはいつて來て、まださう長くはなかつた。東京の學生生活を送ると、上海やロンドンを、何を目的にか經めぐつて來て、二三年以前からある出版會社の專務として働いてゐた。その社は有名な人格者として聞えた人物を社長にしてゐたが、佐藤はその人から子のやうに愛されて十分の手腕を揮ふことが出來てゐた。藤島たちとかれは職業上の關係から知合になつて、すぐに親しくなることが出來た――

佐藤のおでこと言つたら有名だつた――苛辣な實業人物にも似合はず、親しい間では子供の樣に白い前齒をあらはして笑ふのだつた。

『佐藤は藤島をよく知らないんだよ。この男は不思議なんだ。惚れは惚れるんだよ。たゞ激しく惚れて、すぐに卒業しちやうんだ』

今まで默つてゐた青木がいつた。青木はかつて勘彌が扮した生きてゐる小平治の凄味はないが、額が拔け上つて、薄くなつた髪の毛をうしろへ撫でつけてゐた。結城お召の微塵の袷を着流して、骨張つた兩手を胸のあたりに高くこまぬいてゐた。

『藤島は一種の變態人さ。立派な研究材料だよ』

『さうかなあ、僕は藤島君は女に惚れたことのない男かと思つてゐた。』

佐藤は考へ込むやうにした。

『一たいわれ〳〵はそんなに惚れたり忘れたりすることが出來るものかなあ』

藤島はあからめもせず放言するのだつた。

『そりやあるさ、僕と同じやうな心理をドリンクウオタアが取りあつかつてゐるよ。人間には二通りあるんだ。一度に何人の異性とでも戀愛することが出來る部類と、順ぐりに何人とでも後から後から戀することが出來る部類と、これだけあるといふのだがね。僕は全然贊成するね。一たいに、一生一人ッきりの男や女を知るだけで滿足するなんて人間は、よつぽど足りないんだなあ――とまあ僕は思ふんだ。』

『狂人不狂人といふことを言ふが、君達の中にはいつてゐると、どつちが正氣だかわからなくなるなあ』

とデブ〳〵にふとつた赤銅いろの中年男が苦笑した。

『僕は絶對に貞操家だから、そんな心理については何も知らないよ。』

『君はよく飼はれた肥えた家畜だよ――細君のキリスト教趣味が、その通りふとらせてくれたのだからなあ。』

と、並んだ一人が口をはさんだ。

『馬鹿――』

赤銅いろの肥大紳士は笑つた。

この人の好さけな中年人は、鈴本といつて文藝天地社の專務だつた。後者は古澤茂と呼ばれて、いつも濃い眉根の間に立皺を寄せた氣六かしげな男だつたが、不思議に情熱家で、兩三度心中未遂の經驗もあるといふ噂があつた。

2

いづれにせよ、人々はみんな醉つてゐるやうに見えた。小平次に似た青木三十五はあまり酒をたしなまぬ方だつたが、しきりにスタウトの酌器をひかへて上機嫌だつた。

人生がどう廻らうと轉がらうとそんなことを顧慮してゐるやうには思はれなかつた。かれらは相當な人生觀と生活とを持つてゐるやうではあつたが、それに反して實生活の光景はあまり

に淫らで淺間しかつた。清はそれを醉中のひとみでじつと見きはめやうとしてゐた。

――では生活の根本は何にあるのか？

清は師匠や先輩たちの醉ひ溺れたすがたの中から何物かを見いださうとしてゐた。では、結局、何が名聲をもたらし、榮譽をもたらすのか？

清は時々先輩たちを眺めて何がかれらの社會的存在をあたへたのかわからないのであつた。

――あらゆる世界がこの通りだとしたら、人生はどんなに侮辱すべきものだらう！世界はただ愚かに動いてゐるだけではないか！

さう思つたが、不可思議な魅惑は、いつか清の心にも卷きついてゐるのだつた。藤島も青木も鈴本も古瀬も、とりどりにすべての生活を、たゞ、この場所に、このカフエの二階に生きやうとしてゐるやうに思はれた。中でも、藤島は厚顏無恥のやうであつた。かれは近づいたら若い淡紫いろの少女の腰に手をまはして、片手でウイスキイのグラスを口に運んでゐた。

『昨日は昨日今日は今日さ』

『さうさ、さうさ、今日は今日だ――』

古瀬は太い黑い眉根を寄せ合せて、自分もグラスを取上げたが、しかしその聲音には一種たとへがたい哀しげなものがふくまれてゐた。古瀬はあらゆるジャーナリズムの世の中を渡つて

來て、そして新らしく作家として立たうとする男だつたが、藤島とは大學時代からの交友があつて、文學的に一あしさきに進出してゐる友だちを頼りにしてさへゐるのだつた――かれは藤島をどうにかして、より力强く働かせようとして、相手のどんなブザマな行動をも制肘しないでゐた。ある種の人間は非難や叱責を加へたところでどうにもならない――放任してそして自由に野放しに生かして行かう――これが古瀬の腹らしく思はれた。

けれども、さうした友だちたちの氣持を、藤島はかへりみないやうに見えた――かれはふじ紫いろの女給の腰をまだ抱きつゞけてゐた。

『僕は今日は君が格別すきなんだ君は若くて、そしてスラリとしてゐる――』

『ああ、あれだ――』

と、青木は絶望的に叫んだ。

『これだから佐藤が言ふんだよ――この男に戀があるかつて――』

『さうだ、戀は僕にもあるのだ。これが戀だ――この刹那なるものが――ねえ禮子』

藤島は恥ぢ知らずにつぶやいてふぢむらさきいろの禮子の腰を抱きつゞけた。

『昨日情婦と別れたばかりのこの男がさ――』

佐藤はおでこに散りかゝる髪をなで上げながら苦笑した。

『あの情婦は今ごろ何と思つてゐるだらう』

『だから言はないことではない――もろきものは女ッてねー、古い昔のシェクスピアさへ――』

鈴本がたるんだ頬で笑つた。

かれ等の一團は、お互にどんな醜いことでも淺間しいことでも、秘し合ふやうなことはないのだつた――と、言ふよりも、寧ろ、醜いことであればあるだけ、淺間しいことであればあるだけ、それを公に自分から開放し合はうとするやうにさへ見えた。

――地獄でさへも引き受け兼ねるやうな僞惡家どもだ――、この連中がわが物顔に日本の文壇を伸しまはつてゐるのだ？何といふことだらう――

清は憎まうとした。清は醉ひ濁つた頭で師匠や先輩連を十分に觀察して、そして決定的にかれ等を輕蔑しようとするのであつた。清は何もかもよく知つてゐた。少くとも藤島の一身上に起つた最近の情事問題については知らないことはひとつもないのだつた。かれは言はゞ文名といふやうなものを利用して、放埒と情愛との巷を浮動してゐるのだつたが、關係がひどく深刻化して、拔き刺しがならなくなつて來ると、サッと身をかはしてしまつた――もつとも一ばん新らしく起つた戀愛事件だけは、かれのいつものやり口にしては熱心でもあれば、溺れ入つて

ゐるやうにさへ見えたのだが、情婦の方で藤島夫人に氣がねをして身を退かうと言ひ出すと、それを止め立てするでもなかつた。藤島は淸に對して、明さまにかう言ひすらしたのである――

『僕が書物を讀むにどんなに速力的だか、君はよく知つて知つてゐるだらう――女性に對してもさうなんだよ。僕はひどく速くかれ等の心を讀んでしまふのだ。それでネ、三月もたつと妙に退屈して來るものだから――』

かれはたしかに女性を――いきものであり靈魂を持つてゐる女性を、一冊の小說本位しか考へてゐないに相違なかつた。

で、かれは、現在、戀をなげ打たうと決心した後の寂寞をまぎらせるためにたつた一人で世界漫遊の半年の旅に上らうとする情婦と、たつた昨晩あるホテルの一室で一夜を送つたばかりなのに、今夜はかうした明るいカフエの二階で、人一倍上機嫌に笑ひ興じてゐるのだつた――しかも、その最後のわかれの場面を酒の肴のやうに友人の前で吹聽しながら――

かれは相變らず女給の腰に腕を廻して自分の方へ引きよせてゐた――

『しかし、いくら僕だつて、昨夜は妙なふさぎの虫に取りつかれましたよ。何しろ十三時間といふもの、あの女は泣き通しなのだからね――僕は涙をふいてやるためにハンケチをすつかりグチャ〳〵にしてしまつた――』

『まア、御馳走さまね！』

と、女給は藤島の肩を叩いた。

『で、鈴子さんはいつ出發つんだね！新聞では今夜あたり出かけるやうに書いてゐたと思ふが――』

と、鈴本が言つた。

『今夜立つたよ。』

と、藤島が答へた。

『君は送らなかつたの？』

『ああ、送らなかつたよ。鈴子は遠くからでももう一度顏だけ見合はしたいと言つてゐたが、一たん別れるときめた以上は、そんなことはお互のための感情の浪費だからね。われ〳〵はもう少し感情をしまなければならないのだ』

と、ソツ氣なく言つて、

『何かかう胸が痛くなるやうなものはないかなあ――感情の浪費をさへをしまずに突き進むことの出來るやうな世界が無いものかなあ――』

かれはもう新らしい戀愛冒險を思ひ立つて居るに違ひなかつた。

3

呉芝清は藤島がよく言つてゐるのを覺えてゐた——

『地上ではどんなことだつてあり得るのだよ。どんな憎むべきことでも、厭ふべきことでも、怖るべきことでも、汚らはしいことでも、また往々淫らなことでも、どんなことだつてあり得るのだよ。君が作家として立つのなら、それをこはがつてはいかん。それをじつと瞠めてゐなければならん。また、それを實行しても恥ぢてはならん。實行を經て、生活が確立するのだ——われ〳〵は引込思案なイセ宗教家では駄目なのだ。』

藤島はそんなことを言つては、底の知れないやうな冷たい微笑を漏らすのが恒だつた。

清もそれを忘れてはゐない——一々眞理だとは思はないまでも、眞の生活家の態度として、あながちに排斥することが出來ないのも知つてゐた。しかし、藤島が例の持説を、どし〳〵實行に移してゐるのを見ると、恐怖と屈辱とを感ぜざるを得ないのだつた。

自分との戀を思ひ捨てやうと、遠い外國の旅に上らうとする情婦を、もはや過ぎ去つた現象として見放して、カフエのボックスに華やかに着飾つた女給の腰を、出鱈目な愛撫で享樂してゐる藤島を、清はオズ〳〵した目で眺めつゞけた。若い紫色の女給は、著名な小説家の愛撫

を受けて、得意であるに相違なかつた。かの女はきやツきやツと笑つてゐた。

『いけませんわ！いけませんわ！先生はだれにでもお上手ばかりおつしやつて、誰だつて信じやしませんわ、いつかお波さんもいつてゐたことよ。先生はあたしたちのことなんか、わかれて二日と覺えてゐはしないつて——』

『それでいゝじやないか？毎日毎日逢つてゐたら、感激はいつまでもつゞくのだよ、君と僕とはいつまでも愛し合つてゐられるのだよ。』

と、藤島はさゝやきつゞけてゐた。

『いゝえ、駄目よ、先生は今夜遠いところへお發ちになる女の方をさへお送りにならない方ぢやあないこと！薄情もの！』

『それといふのもその女が、僕の愛情から逃げ出さうなぞと、大それた望みを起すからさ——あの女は、だが、却つて惱むばかりさいつまでも〳〵、どこまでも〳〵僕の愛情の記憶に惱まされてるのさ、僕はそんな退嬰的な感情に、いつまでも殉じてやるひまはないのだよ。君が僕の側にくッついてゐさへすれば、一刻一刻君は幸福なんだよ。』

『私、先生の言葉を聽いてゐると何だか變になつて來るわ。卷き込まれて來るやうな氣がするわ』

やつと女學校を出て、一年が經つか經たぬかで、華麗な生活にあこがれて、大した惱みもなくこんな世界へ飛び込んで來てしまつたやうな娘は、明かに誘惑されたやうに、グタリと藤島の方へ身をもたせかけるのだつた。

——怖ろしい——！

清はそこに、一匹の白蜘蛛にグル〳〵と卷きつけられて、だん〳〵に肉を食はれ、汁を吸はれてゆく小さな犧牲をみとめるのだつた。

——師匠は蜘蛛だ！

清は突然哀しくなつた。醉ひはかれの心をあまりに動き易くしてゐた。故知らず涙があふれさうになつて、兩手で顏を蔽ふやうにしてテーブルにうなだれてしまつた。

が、あたりの人々は、そんなことには少しもかまはなかつた。鈴本と古瀨とは顏を突き合せるやうにして何かさゝやき合つてゐた。二人の面上にはある淫らな表情が微笑となつてたゞよつてゐた。

——ほんとうに、誰一人、清のなみだなぞに氣がついてゐるものはなかつた。

中でも出版社專務の佐藤は、相變らずの潑溂たる元氣で自分の側へ來た褪紅色の着物を着けた二十三四の女給の、胸高に締た帶の上にむつちりふくらんだ乳房のあたりを、白いエプロンの上からさするやうにしながらいふのだつた。

『君は戀人が幾人あるのだね？戀人を幾人持つてゐるのだね？たとへ百人あるとしても、その中に僕をかぞへてくれたら、それでも僕は滿足なんだよ。ね、どう？』

女給は踵を高くした紫緒の草履をはいた足で、輕くステップを踏むやうにしながら笑つた——

『まア、あなたは隨分謙遜な方なのねえ？あたし、謙遜な方が大すきよ、ほんとのことをいひませうか、實は今夜までに戀人が、九十九人——あなたで恰度百人よ、おあつらへ向きでしよ？』

『ハ、ハ、そいつはすばらしい、じやあ僕でもう打止めにするさ——ねえ、その堅めのしるしにキスをしやう！』

彼は無遠慮に、女を抱き寄せた女は笑つて顏を反けた。

キスなんか、みんなの前ではちつとも甘かあないことよ——またいづれ——」

『フム——キスは日延べか！』

と、佐藤はつぶやいて、そして歌ふやうにつけたした——

『キッスしませうか？　お酒のみましよか？　それともダンスをどりませうか？』
『一ばんあとが罪がないことよ？あなたをどれて？』
『心細いことを訊くものだ、僕はこれでも本場仕込みだよ！タ、ララ、タ－』
佐藤は立ち上つた。そして緋紅色の女給の腰を抱いて、テーブルの側でワルッををどり出した。

どこもかしこもが、すべてのテーブルが、ひとのことにかまはず刹那の快樂をたのしんでゐるのだつた。客人たちは、こゝにすわつてゐる間は、こゝで滿たされる範圍の享樂に醉つてゐるのが一ばん賢いと信じてゐるに相違なかつた。

清たちのうしろのボックスには、二十二三の淡青い背廣を着た青年が坐つてゐた。彼と、たつた一人そこに侍してゐる綠つぽく光る着物を着た大そう痩せた娘とは、戀に落ちてゐるにちがひなく思はれた。二人はさつきからヒソ〳〵と何か話してゐたが、清の耳にひゞくほど、ホーッと深いため息を娘は吐いて、そして、突然、蓮葉にさけんだ――

『世の中なんて、考へ込んでゐたつてつまらないわよ！あたし達、若いんじやないの！ね、良さん、うたひませうよ！』

で、うら若い青年も、氣を取りなほしたやうに、テノルで合せた。

×　×　×

打つて下さい
フエビヨンさまよ！
打つて、お胸が
晴れるなら！
どうせけがれた
ササこのからだ
七重八重捲く
とり繩よりも
戀のきづなが
身をせめる
せめてマノンに
ササ今一目

×　×　×

清はなほのこと胸が痛くなつたカフエの小娘との戀に醉つてゐる青年がうらやましくなつ

た。

——みんなは快樂を知つてゐる僕には苦痛ばかりだ！どこもかしこも！

4

『何んだ？　佐藤のあの跳ねッぷりは！　ホ、空テーブルへ打つかつた！』

何やらひそひそ話しをしながら、淫蕩な微笑をうかべてゐた、鈴本、古瀬の中の一人が、佐藤が相抱いてをどる女給の尻を、ドカリと何かへたゝきつけてしまつ時いつた。が、二人はもうその方はかへりみずに、今までの話しを熱心にしつゞけてゐた。

『僕だつて、心中の經驗がまるでないわけではないんだよ——僕は無理心中をやられかけたんだ。大阪でね——ソラ、中之島でネ。僕も若氣のいたりで、あつちで記者生活をしてゐた時なか〳〵通つたものなんだ。すると妓の奴がひどく惚と來てネ——』

『その頃は君だつて、そんなにデブ〳〵してはゐなかつたらうなあ——もつとすんなりした——』

と、髪の毛だけが青年のやうに濃い古瀬が微笑はずに尋ねた。

『ウム、まあ多少ネ』

と、鈴本はうなづいて、紙卷きをくはへて、銀製點光器で器用に火をつけたが、

『すると、ある晩、その妓が、何でもセンチメンタルに雨のふるまつ暗な夜だつたが、突然僕に言つたものなんだ。あんた、おかか、おまつか？　と訊いたんだよ』

『ふむ』

『で、あると答へたんだ、するとネ、かの女がいふには、おかか殺しちまへ——』

古瀬が醉ひ染つた顏をあげて鈴本を眺めた。鈴本はちよつと氣まり惡さうに口をすぼめた——

『女房を殺しちまへ——自分が後釜へすわつてやるといふんだ。女にかけてはまあ相當の覺悟が出來てゐるつもりの僕だがその時はゾーッとしたネ』

さもゾーッとしたらしく、かれは大きな肩をすくめて見せた。

『で、それッきりになつたのかい？』

と、古瀬はたづねた。古瀬はさうした結果には物足りないやうに見えた。かれは青年期にはひどい情熱家で、今でも一度戀したらどこへゆくかわからない——と、自分を危險がつてゐるのだつた。妻も子たちもあつたが——

『それッきりさ、君だつて——君のやうな情熱家だつて、結局心中が不可能だつたじやないか

——女郎に殺されるのは、あんまり下らないからね』

鈴木はいくらか古瀬にいどむやうに言つた。古瀬は妻帯してから出來た女と、熱海まで情死に出かけて行つて、旅宿で齒痛を起し、その痛みに依つて感情を反らされ、痴話喧嘩をして歸京してしまつたといふ歴史を持つてゐた。仲間はその事實を持ち出して時々からかふのであつた。

『いや、しかし、心中なんか行つて見りやあ何でもないさ』

と、古瀬は固執した。

『相手がどんな女だつて、女に變りはありはしないよ』

——清は頭がわれさうに痛くなつた。何も見たくも聞きたくもなくなつた——

『どうしたんだね？　君？』

ふと、聲をかけられて、かれは赤濁つた目を上げた。それは青木三十五だつた。かれはスタウトのコップを手にして、抜け上つた額まで眞紅にしてゐた。

『氣分でも悪いのかい？』

『いゝえ。』

清は自分の存在を、はじめて注意されてうれしい氣がした。

『いゝえ、何でもありません。』

『清君』

と、青木は、スタウトの最後のしづくを傾けて言つた。

『君もあんまり飲らないやうだが、お互にこんな酒飲みたちにいつまでも本氣でつき合つてゐたら大變だぜ、僕はもうソロ〳〵引き上げだ。』

『なあんだ？　君はもう歸るのか？』

そばに腰を下ろしたまゝ、相變らず、紫色の女給の手を握つてゐた藤島がかへりみた。

『今夜、どこかで坐つて話したいと思つてゐたのに——』

『大森で待つてゐるから——』

青木は洒然として言つた。大森には青木の戀人が彼に保護されて栖んでゐた。もと一流の土地の藝者で、美貌と才華とで賣つてゐたが、いろ〳〵な浮き沈みがあつた末、貧乏時代の青木といゝ仲になつた。もう十年からになる間柄で、切つても切れない深い關係でつながれてゐたから、友人たちも、どんな場合にも、彼が大森を持ち出せば、自分たちの側へ強ひて青木を引き止めるわけにも行かなかつたのである。

『大森もいゝが、あの女に君はまだ惚れてるのかい？』

よく退屈しないものだ――と、いふやうに、女給とのダンスを止めた佐藤が近づいて訊ねた。

『むかうで惚れてゐる。』

青木は手短に答へて、立ち上つた。

――清は青木のうしろすがたを――ひよろ長い後すがたをながめた。かれは藤島の友人たちの仲でこの青木といふ男が一ばんたのもしいやうに思はれた。筆を取ると辛辣な皮肉家だつたが、逢へば物やさしく、口かずも少く、どんなに素行が亂れてゐるにもせよ、たつた一人の女を十年も愛し通してゐる心意氣がうれしかつたのである。

藤島はあくびをした。かれは青木が立つたあとで急に自分も席を移したくなつたらしかつかれは異性に對して移り氣であると同樣に、同じカフエの同じテーブルにはすぐに飽きてしまふやうに思はれた。

『どうだね、諸君、僕たちもおみこしを上げて、どこかへ行かうじやないか？』

『まだ早いわ！　まだ早いわ！』

藤島に甘言を弄されて、すつかりよろこばされたやうに見える紫色のむすめは、白い指先でかれの腕にからみつく樣にした。

『でも、君との約束はもう濟んでしまつてゐるじやあないか――あの約束は忘れては駄目だよ』

藤島はかの女にさゝやくと、年嵩の女給を呼んで勘定を命じた。

みんなが時間に借りのある連中ではなかつた。夜と晝とをいつ取りちがえてもかまはない人達だつた。

『さあ行かう！』

どこへでも行く先は懸念せぬのである――樂しく、にぎやかに、存分に、醉ひ、笑ひ、自墮落が生來るところへ行くのなら結構なのである。

カフエの外は、まだ明るくにぎやかな銀座だつた。ほとんど異性同志の伴れでないものはない散歩客が、ほしいまゝに身をよせ合つて歩いてゐた。初夏らしい薄いろのスカートがひるがへつて、香料の香がそこら中に漂つてゐるやうに思はれた。一同は待たせてあつた自動車に乘つた。

『大川端へ出てくれたまへ。』

と、藤島が運轉手へいつた。すべるやうに乘ものは走り出した。

『いゝ夜だ！ブラヴォ！』

古瀬がつぶやいた。

5

――一圍のよつばらひを乘せた自動車は、ガランとだゝッ廣い割合に人通りの少い銀座どほりへ出て、左に折れ、靜かな薄暗い新道をはいつて行つた。

このあたりには瀟洒な門構への粹な家が一廓をなして並んでゐた。

その一軒の前で自動車は止まつた。自動車の中からつゞいてゐる淫らな會話を、そのまゝかまびすしく語り合はしながら玄關へ下り立つた一行を、かうしたところの帳場にすわつてゐるとは思はれないやうな、近眼鏡をかけた二十五六の丸ぽちやの人が現れて迎へた。

『まあ、お揃ひで――大變な御機嫌ですこと――』

二階に導かれると、そこは黑い大川の水を一目に見晴らす眺めを持つてゐた。涼しい風が、灯かげを宿してゐる水面から流れて來てみんなの醉顏をこゝろよく吹いた。

『ウイスキー、ビール、それから妓だ。』

と古澤が命じた。

ちゞれッ毛を意氣がつた小さな丸髷に結つた女中が、卓の上にグラスや酒罐や突き出しの小皿なぞを並べた。そして妓たちがはいつて來る前に、すぐに醉を新たにしようと一同は努力す

るのだつた。――まるでどうしたら一生の間この醉心地をつゞけられるかと懸命になつてゐるのでもある樣に――

だん〳〵にやせたをんなや肥つたむすめ達がはいつて來た。髮は一やうに眞黑で、顏はどれも之も眞白だつたが、着物の好みはめい〳〵に變つてゐるから、とにかくかの女等が適宜の位置に配列されると、一種の色彩は感じられるのだつた。そしてさつきカフエで女給の腰や胸に興味を抱きすぎるやうに見られてゐた人達が、こゝえ坐ると、まるでこの女達のみが愛情と感覺との對象でもあるかのやうな態度を取りはじめた。

『吳芝君、君はどうして飲まないんだ？』

藤島がチラリときつい目を清の方へ送つた。清はつがれたまゝ手をつけなかつたグラスを取り上げた――あまりに辛く、あまりに苦いさかづきだつた。

――師匠は僕がもう飲めないことを知つてゐながら、あゝ言つたのだ？　師匠は飲めもしない僕が、こゝまでついて來た氣の弱さを嗤つてゐるのだ。だのに、僕はまた飲んでしまつた――

清は屈辱を感じた。

しかし、藤島はもう清の方なぞは注意しなかつた。かれはなみなみとグラスに充ちた强い酒を、かたはらに坐つた廿六七の綠いろの藝者と半分づゝ飲んでゐた。藝者の右手の中指には、

突拍子もないダイヤモンドが、キラリ〳〵と青白いきらめきを輝かせてゐた。

『あたし、折角一度醒めてゐたのに、あなた方のお座敷へ來ると、今夜もまたベロン〳〵だわ』

と、其をんながぽうと目の下を染めて、酒の後口の辛さに、紅い唇をすぼめるやうにしながら言つた。

『君たちがよつぱらひでもする外にどんな役目があるのだい？、どんな役に立つのだい？』

藤島はむしろ憎々しげに呟やいたが、彼の毒舌は例の出鱈目な微笑に緩和されてゐた。

『あたし達だつて、まだ外にいろんな事もしてよ。』

『旦那の白髪を抜く役か？』

と、鈴本が言つた。彼はひどく肥滿してゐるので、かうした仲間であるよりも、請負師か實業家のたぐひのやうに見えた。

この尤もらしい中年肥滿紳士は出版雜誌界では、文學者出だといふので一種獨得な地位をしめ、劇壇、活動寫眞方面なぞへも首を突ッ込んで、なか〳〵敏腕な働らき者としてきこえてゐた。文藝天地社長としてよりも、文壇の巨頭として名高い、傲岸剛腹な樋口宏でさへ、この人物だけは信認してゐるらしく、自分の會社の專務として据えてゐるのだつたが、これがアルコ

ホルが廻つて來て、しかも周圍が飲み仲間だけだとなると、突然、いつも心の底の底に押つけてゐる遊蕩心がムラ〳〵と起き上つて、まるで市井の無賴兒のやうに、スツぱだかになつて、蠻人踊りだの、フラ〳〵だんすだのといふ、奇妙奇怪な手ぶり足まねをはじめるのだつた。

だものだから、それを知つてゐる若い藝者たちは、半鈴本への御機嫌とり、半一座の空氣をほしいまゝに、するために、だぶだぶとおつこちさうな頬ぺたが赤らんでくるころには、

『スウさん、また、だんす見せてよ。うたつて彈くわよ。』

なぞと、甘つたれた調子でやり出すのだつた。

もとよりどんな淺ましいことも穢らはしいことも、かうした場所では許されないことはなかつた。恥る要もなかつた。

『よし來た。やつつけるぞ。』

キユウと强烈な酒を二三杯引つかけて、鈴本はヌツと身をおこすそして次ぎの間へ出かけてそれがふた〳〵びすがたをあらはす時には、五分刈あたまに向ふ鉢卷、べん〳〵たる腹をさも自慢げに突き出して、猿股ひとつ、ゆらり〳〵とをどりはじめる。すると手を振り腰を振るたびごとに、からだ中にべた一めん食ッついた贅肉が、まるで肉ぶくろのやうにブル〳〵ダク〳〵と搖れ動いて、世にも不思議な、世にも笑ふべき、世にも馬鹿げた現象を演出するのだ。

『アッハ、ハ、ホウ！、ハ、ハ、ハ、ブラヴオー』

この世の中の出來ごとには、あまさず興味を持つて、いつ何どきでも樂みを貪ることを忘れない藤島が、眞先に、いかにも面白さうに笑ひ出す。それから佐藤だつて古瀨だつて、出鱈目な唄をうたひながら、手を拍つたり卓をたゝいたりするのだつた。

鈴本のこのはだかをどりが了るころからは、いつも一座は狂醉の絶頂に達することになる。だれかがべろんこになつて醉ひ泣きをはじめたかと思ふと、だれかは肥つた藝者の手の甲や二の腕に嚙みついて、血がにじみ出すのをうれしさうに眺めて、ヒッヒッと卑しい笑をうかべはじめる——そしてどんな亂暴でも淺間しさでも、相手の藝者どもは、何しろ文士だから——常人の心理とは違つたものをもつてゐる連中だから仕方がないとしてそれをゆるしてゐるのだつた。それどころか彼等の虚名を崇拜して、この低劣な快樂の場に自分がつらなり得たといふことを誇りにさへしてゐるものもあるのだつた。

——清は今夜も鈴本のはだかをどりがはじまるころから、今までおびえにおびえてゐた頭痛が昂じて來て、もうどうにもやり切れなくなつた。ことさらさつきの藤島の皮肉な目つきを考へ出すと座にゐたゝまれなくなつて來た。

彼はソッと座をはづして、外へ出た。低い初夏の深夜の空に、生溫かい光りを帶びたまどろ

み勝ちな星かげが見えそめてゐた。

彼は足にまかせて明るい灯の照りかへしを投げてゐる街の方へ歩き出した。

戀

1

——清はうなだれ勝ちにあるきつゞけた。悪酔ひをした頭はまだヅキ〳〵うづいてゐたが、しかし爽かな濕つぽい夜かぜは、ほててた頬にこゝろよかつた。

——出て來てたかつた。

清はつぶやいた。あゝいふ亂酔の場所は感じ易い彼にはなか〳〵堪へがたい世界だつた。藤島はさうした場合、弱り疲れた清の顏をながめると、

『そんなことでどうなるんだね？作家てやつあ、自分の戀人が首を吊つた時でも、どんな表情をうかべてゐるか見きはめるだけの勇氣が入用なんだよ。まして酒なんか何だね——すぐに醒めてしまふものじやないか？そんなものに辟易するやうじやあ、とても見込みがないね——』

清は肉體的にはどんなことでも何でもないと思つた。もつと手ひどいことでも、忍べば忍べないことはないと思つた。しかしあゝいふ席上が醸し出す穢らはしく不純な空氣にはやり切れ

なかつた。そこには人間を高める何等の生活もないやうに思はれた——たゞ穢らはしさと卑しさとのみがはびこつて、じつとしてゐると、彼自身もいつかそのねばつこい蔓に捲きつかれてしまつて、身じろぎも出來なくなるやうに感じられるのだつた。彼にはそれは辛抱がなり兼ねるのだ——彼は絶えず何か高まりたい、清らかさと美を見たい——それを見出すことが、青年としての自分の義務であるとしか思はれないのだつた。

——じやあ、なぜ僕はあの人に食つついてるのだらう——あの人から離れたらいゝぢやないか？　さうすれば、何もかも奇麗サツパリだ？　けれども何度さう思つても、それが實行出來ないのが彼の最も根底をなす惱みだつた。彼は文學と藤島とに憑入られてしまつてゐるといつてもよかつた　何やら奇怪な粘着力を持つた魅惑が、逃げようとすればする程からみついてくる氣がした。

しかし、藤島さんの言葉も理のないことはないのだ。僕はもつと鋭い目で、自分を取りまいてゐる生活を見拔かなけりやあならん。こんな刺激で、クタ〳〵してしまうやうでは、なるほど文學なぞで生きるわけにはいかんかも知れん。

一度、心から藤島をのろつたあとでは、いつもこんな風に思ひ直してしまうのだつた。

全く、清に取つては、藤島は一種いひがたいみ力をもつた存在であるに相違なかつた。

清はいつか通りへ出てゐた。

狹い町並の、明るい歩道にはもう人かげがまばらだつた――

彼は向ふに見える停留場の赤い灯のそばへ行つて、電車を捉へようとした。

すると、思ひがけなく、彼方から近づいて來た若い男女づれが、ほとんど通すがらうとした時、男の方が彼に言葉をかけた。

『君は、吳芝君じやないか？』

清はふとうなだれてゐた目を上げた。立ち止まつてゐるのは、ひどく背高な、黑の夏背廣を着た二十三四の若ものだつた。

『おゝ、本田君。』

清はボンヤリと答へた。

『どこへ行つたの？。』

と、本田と呼ばれた青年がたづねた。

『藤島さん達と、銀座から方々。』

『へえ！、じやあ、例によつて？』

本田は薄い唇をゆがめるやうにして笑つた。

――本田は唇をゆがめて嘲笑しつゞけた。

『君はあの人達と一緒に歩きまはるのが大好きなやうだねえ――面白いかね？　酒やよつぱらひの出鱈目が――』

清ははづかしめられたやうな氣がした。ことさら、本田のうしろに小さく隱れるやうに身をそばめてゐる、あまりみなりはよくないが、美しくしほらしい娘に氣がつくと、そのひとの前でそんなにいはれるのが辛いのだつた。

『僕だつて、あゝいふ世界をちつとも好いてはゐやせんさ。』

と、清は答へた。

『だつて、君はよくあの人達と歩いては、二日よいで頭痛に苦しんでゐるじやあないか？』

本田はさういつたが、ふと思ひついたやうに、

『君にはまだ知らせてゐなかつたかなあ、僕はつい一週間ばかり前この近所へ越して來たんだぜ。立ちばなしもつまらない。ちよいと寄つて行き給へ――歩きながら話さう。』

清は否まうと思つたが、否み切れなかつた――本田に頭からやりのめされたあとで、すぐに別れるのは、尻尾をまいて逃げるやうな氣がして嫌だつた――彼はさうした見得を弱さからくることは知つてゐたが、それをどうすることも出來なかつた。

彼はいはれるまゝに本田について行つた。本田の伴れの少女にはすこしも注意しないやうな態度をよそほつた。彼はかの女に默禮したゞけで、本田と肩を並べた。

『實をいふと、僕は君の氣持がわからないんだぜ。君は好きでもない世界へ、いつもヨタ〳〵とついてあるいてゐるんだ。損な性分だなあ――君が、君と全く異つた性格の人間ならそれもよからうが――君は全然無打算だし――』

本田の語調には、今までのやうな嘲笑的なところはなくなつて、非常に親しみ深い調子になつて來た。

『しかし、君だつて、藤島さんのところへ三日にあげずやつてくるじやないか？』

と、清は逆ねぢをくはせやうとするやうにいつた。

『ハ、ハ、ハ。それは行くさ。藤島さんは僕たちの先輩には相違ない。それにあの人にも尊敬すべき才分や氣性があるさ。僕はその點を取るのさ――僕はさうしたあの人が好きなのさ。だが、あの人にも僕たちに不必要な精分が、――毒藥のやうなものが澤山ある――あの人の毒にあてられることはいやなんだ。』

彼は狹い路次へはいつて行つた。そして突き當りの二軒長屋の一軒の格子戸をあけた。

『おばさんたゞ今。』

奥でかすかにそれに答へる聲がした。

『はしご段があぶないぜ。』

三人は天井の低い六疊に上つた。最初は暗かつたが、机の上の電氣をひねると、急にあたりがあかるくなつて、小さな書棚などを照し出した。

少女は相變らずつゝましやかに壁際に座をしめてうつむいてゐる。

『あゝ、まだ二人を紹介しなかつたね？　これは僕の遠緣のむすめだ。場末のカフエに流れてゐたのを拾つて來たのさ、お君つてんだ――こちらは吳芝清――僕の親友の一人。』

むすめは紅くなつて頭を下げた。青白い頰にかすか血の氣が上ると一さう美しくなつた。

清もちよつと頭を下げた。

2

清は美少女と默禮を交したあとで、一種の好奇心をもつてひそかにその娘に注目せざるを得なかつた。何等ためらひもなく、場末のカフエーから引取つて來たと本田が言明したにもかゝはらず、壁ぎはにひツそりと小さく坐つた彼女にはさうした場所で荒んだ生活をして來たやうなところは少しも見えなかつた。どこもかもが、やさしくて、ほつそりしてゐて、化粧も濃く

はなく、髪の結ぶりも尋常だつた——

——何といふ澄んだ目つきをしてゐる娘だらう——

清は心の中で思はず呟やいた。

彼は不思議だつた——自分の目や心が、貧しげな、刺激のすくない服裝をして、しよんぼりとすはつた娘から、すぐに離れてしまはないのが不思議だつた。銀座の大カフェーの、根生はさもしいくせにいたづらに華々しく着かざつて目のまはりに青や紅の紛黛をほどこした女たちや、名だゝる遊蕩地の一流の藝者たちの間にゐても、すこしも、いざなはれぬこゝろがこのさも見すぼらしい小すゞめにだん〳〵にひかれて行きさうに感じられるのが不思議だつた。

『この人も苦勞したのさ。』

と、本田はいつた——

『たつた一人の病人のお父さんの最後を守つてやるために。一番金の取れさうなカフェーへ行つたのだ——お父さんはおかげで、勿論施療ではあつたが、それでも小遣ひにはこまらずに死んだ——お父さんが死んだといふ知らせで、僕も葬式に行つて、このひとがそんなに苦勞してゐたことをはじめて知つたのだがね——それで、結局場末のカフェーなんていふところは娘さんたちにはあんまりいいところではないから、さういふ商賣はよすことに注告したのさ。で、行きどころがないので、一時僕の部屋にゐることにしたのだが——』

——では、本田とこの娘との間には、すでに何等かの心の交渉があるのであらうか？　いゝえ、そんなはずはないだらう——本田はいつも、女性と肉慾とを輕蔑しようとしてゐた。彼はいつも、さうしたものは刺激が稀薄すぎて、生活の對象にするには足りぬことを放言してゐた彼は常にいふのだつた——

『若僕の人世に對する情熱が、もう何十度か低下したならば、その時には戀もするだらう——しかしまだ駄目だ、僕の戀の相手は外にある——』

彼は智識や文學や——もつと實際的な社會運動に對して彼の青春を傾倒しつゝあつた。

——清がそんなことを考へてゐるうちに、本田はまた話をもとの方へ戻してゐた。

『君は好んで疲れを求めてあるいてゐるのだよ——今夜なんか、だん〳〵話してゐるうちにも頬が削けてくるじやあないか？　君は野獸狩りの仲間には不向なんだ——藤島さんの懇意な連中を見たまへ、なか〳〵獰猛なつらだましいの奴等ばかりだぜ。奴等は野獸狩の獵師には持つてこいの人達なんだ。ところが、君はさうじやあないんだ、とにかく僕はあゝいふ冒險家、投機家のたぐひはすきじやあないよ。人生惡や人間惡にどこまでこびようとする奴等なんだ——奴等の一日一日を、生活を腐敗させるために送つてゐるんだ——』

本田は呪はしげな、激しい言葉でいつた。

『君、藤島さんを見給へ――、あんな僞惡家を二人と見たことがあるかね？　僞惡家は僞善家より百倍も人間を腐らせるよ。』

――美しい娘がいつまでも壁際でうなだれつゞけてゐるので、本田は氣がついたやうにふりかへつて笑つた。

『何だね、お君さん、君はまるでやもり見たいじやないか――壁へばかり貼りついてゐて――すこしこつちへ出て來たまへ。』

お君は微笑した。そして細そりしたからだをいよ〳〵小さくして行儀よく揃へた膝をじつとみつめるやうにした。

『このひとはね、隨分内氣すぎるんだよ、こんなひとが場末のカフエーでつとめ奉公をしてゐたんだもの、辛かつたのはあたり前だあね。』

そして付け加へた。

『でも、もう大丈夫だよ。僕の部屋は貧乏だけど、安心なんだ――君を傷つけるものはありやしないよ。』

清はお君に話かけたかつた――

『おいくつなんです？』

自分ながら下手な質問だつた。けれどもお君は答へてくれた――青白い頰の一部分をかすかに染めて答へた。

『十八ですの――もう、ぢき滿十八。』

本田はかたはらから言つた。

『女學校を三年までしかやらなかつたんだ。大變出來がよかつたといふのだけれど、駄目になつてしまつたのさ――運が傾いて來るとどこまで曲つて來るかわからないものだからね、しかしこれからは屹度何もかもが、良くなるだらうよ』

本田は性得の皮肉にもかゝはらず、お君にだけはやさしかつた。まるで不運な、久しく別れてゐた妹にでも對するやうな態度を見せてゐた。

清はまだ二人に對する微妙な注意を忘れなかつた――もつと深く二人を見たい――二人の間はどこまでも純潔なのかしら――。

若し何もないのなら、どうしやうといふのだ？。

彼は自分を嗤はうとした。そして、折角長い流浪生活から休息の世界へ移つて來た一少女を

不意の闖入者が、いつまでも妨げてゐるのは心ないわざだ――と思はれはしないかと感じるのだつた。

『ぢやあ、僕はもう失禮しやう。』

と、彼は歸り仕度にかゝつた。

『いゝえ、まだいゝんだ――まだ早いんだ。』

本田は、立ち上つて押入に首を突込んだ。そして、ビールを二本ばかりつかみ出して來た。

『これは引越し祝ひに貰つたんだよ。僕は酒を當分よしてゐるんだ君は飲むだらう。ねえ、お君さんお酌して上げたまへ、この男は何んでも飲むんだ。』

清はお君の前で、ふしだらな生活について云はれることがつらかつた。彼だつて正しい清らかな世界に、一日も早く、出來ることなら移りたかつた。それがもう長い〳〵こと出來ないのだつた。何かキッカケがあつたら――何か機會があつたら、よりよき生活を見るだらう？

彼はまだうら若い青年だつたから、その機緣に戀を求めようとするに無理はなかつた。そして、今夜偶然逢つたお君を特別な目で見ないわけにゆかないのだつた。

けれども、お君は下からコップと栓抜を借りて來て、ビールの酌をした。

『さ、お注ぎいたしませう。』

その容子には、思ひがけない場馴れた調子がはつきり見えてゐた。

3

――清はお君が、そのうら若さとにも拘らず、ビールの酌を取る手元の馴れ切つてゐるのを見ると、何とはなしにはかない氣持がしてくるのだつた。

――生活がみんなを押しつぶしてしまふのだ――ねぢ曲げてしまふのだ。

と、無暗に感じ易くなつてゐる彼は、そんな風に自分に呟やいて見ずにはゐられなかつた。

勿論さうした氣持がわかるはずはなかつたが本田は机に頰杖をついて清の方を眺めながらいふのだつた。

『兎に角、われ〳〵青年は、あの連中とは時代が違ふんだぜ――彼奴等はみんな十九世紀人なのだ――ほんものの現代人じやあないんだもつとも彼奴等だつてそれを知らないわけじやあないさ。現に藤島さんなんぞは、自分でも、僕たちは十九世紀頽廢主義の遺し子だ。今更どう焦つたつてどうにもならないさ――なぞといつてゐる。つまり覺悟の上で、いつも首の座に据はつた氣で、ああいふ刹那的享樂を追つてゐる人が、彼奴等はどうもがいて見たつてもうはじまらない人種なんだから――ところが君や僕は違うよ。僕たちはもつと新鮮な正しい

意識をもつて生きる特權があるんだ。僕たちは決して彼奴等の遺産を相續する必要はない。全く新しく、別な、大きなものをうみ出す權利を持つてゐるのだ――この點だけは君だつて承認するだらうが――。』

『それは承認するよ。』

と、清はビールのコップを干しながら答へた。

すると、お君が、また新しくそれを充たすのだつた。

『して見れば、君は現存の生活を改新する必要があるじやあないか――それは明瞭な問題じやあないか――僕は君が大變好きだが――他の點でどんなに君が好きでも、女々しくあの人達の誘惑に同じて下らない生活にまじつてゐるのが不愉快なんだ。』

清は藤島たちをはなれて、一人になつて見ると、本田からいはれるまでもなく、自分の弱々しい性質をなげかないではゐられない。

だが、彼はもうあまりに深く彼等の仲間に深入りしすぎてゐた。

『君は腐つちまうぜ――全く。』

と、まるで、とゞめをさすかのやうに、本田がズバリといつた。

清はだん〳〵黄濁つてくるビールのコップをみつめた――すると、自分があまりに穢らはしく、下らなく、取るに足りないものゝやうに思はれて來て、たうとう肉體的にズキ〳〵と頭痛さへ感じられてくるのだつた。

彼は米がみをもみはじめた。そしてひどく急激に襲つて來た嘔き氣を怺へやうとしてぐつとうつむいた。

――飲みすぎてゐる――全く飲みすぎてゐる――

彼は本田の好意のビールを口にしたことがまた口措まれてくるのだつた。そして口惜ながらふたゝび自分を叱つた。

貴樣はいつだつてその通りだ。あとから〳〵つまらないことをやつては後悔してゐる。

『どうかしたのか?。』

と、本田がたづねた。

『ウム――ひどく頭痛が――』

『そりやあいかん――少し横になりたまへ。君は疲れすぎてゐるよ。』

清は苦痛に抵抗することが出來なくなつて、その場へ横になつた。お君は座布團の枕をさせてくれたり、階下から手拭をひやして來たりして、親切に介抱してくれるのだつた。

——清は激しい頭痛を忍びながら何度かお君に介抱の禮をいふのだつた。

『構ひませんわ——ゆつくりお休みなさいね。きつと惡醉ひをなすつたんですわ。』

お君はささやくやうにいひなだめた。

『ありがたう、もう大丈夫。』

彼はしづかに目をとぢてゐたが、いつか極端な疲勞の底に昏々と睡りが襲つてくるのを感じた。

——十分間か、それとももう少しウト〳〵と假睡したあとで、彼は目をさました。頭痛はいい案配にいつか去つて、鈍重な壓迫感が後頭部にのこつてゐるにすぎなくなつた。

清は身を起した。

『いいんだよ——もし歩くのが臆劫なら泊つて行つてもいいんだ。冬の寢道具だから、二つに分けて君とお君さんが寢ればいゝ。僕は恰度讀みかけた本があるから、どうせ徹夜して勉强するつもりだつたのだよ。』

『いゝえ、大丈夫だ——大變いろ〳〵心配をかけてしまつた。』

清は親切に止めてくれるを振り切つて外へ出た。もうとうに電車がとまつて、中ぞらを流れてゐる月の光りが大そう清爽な感じをあたへてゐた。

彼はタキシーを呼びとめた。

彼が住んでゐるアパアトは、牛込の外濠添ひにあつた。タキシーから下りて、暗いひつそりした階段を上がつて、づぼんのかくしに部屋の鍵をさぐつた。

鳥打を椅子の上に投げつけるやうに置くと、着のみ着のまゝでベッドに寢ころんだ。背骨がづき〳〵とうづいてゐたが、そんなことは氣にするひまはなかつた。このごろ亂醉亂酒の群にはひつてから體のどこかに苦痛がないことはないのだつた。

——全く本田がいふ通りだ。激しい勢ひで傾いて行かうとするあの仲間にいつまでもはいつてゐたら、體も心もクタ〳〵に腐つてしまふに相違ない。

卓上電氣の灯をじつとみつめてゐるうちに、ぽうと光輪にかこまれた小さな女の顏がうかんで來た——その小さな娘らしい顏はいくらか微笑してゐるやうにさへ見えるのだつた。

——ああ、お君さんだ！

彼は光輪にかこまれた娘の顏が消えてしまうのを恐れるやうにじつと〳〵みつめた。そしてそのまぼろしが消えてしまつたころには深い、重苦しい思ひの中に陷入つてゐた。

——本田とあの娘との間にはどんな問題もないのか知ら——

さうした關係が、二人の間に存在することが當然である以上によろこぶべきことであるには

相違なかつた。それを彼自身が心からよろこぶことが出來ないのが、不快で惱ましかつた。

そしてまた思ひなほして見た。――いゝえ、本田とお君ちやんとの間には何もありはしない本田はあゝいふ男だ。何もあるはずがない。

若し二人が清らかだつたとしたら？

彼はあきらかに戀しはじめてゐるに違なかつた。萬一、お君が自分の愛情をうけ入れてくれるとしたら、恐らく今夜すぐにでも手をもとめたにきまつてゐるのだつた。

夜が深まると妄想はだん〳〵深刻になつて行つた。戀と、文學的野心とが、彼をぐんぐんと引きずりまはした。

眠ることが出來たのは、安物のカーテンをすかして、白々と朝の光りが流れ込みはじめたころであつた。

4

――翌朝は、カラリと晴れ渡つた良日だつた。清はアバアトの薄暗い一室で目をさました。頭がヅキ〳〵うづいて、胸の芯がチクチクした。

――さうだ、昨夜は飲みすぎてゐたのだ。

銀座から、大川端へ出て――それから本田に――本田に忠告されたつけ。

本田に――彼は突然思ひ出した。美くしい、柔しい一少女の面影を思ひ出した。お君を思ひ出した。

清はベットに仰向きに寢たまま、天井を睨んでゐたが、突然刎ね起きた。さうだ、いろいろあの娘に厄介をかけた。みぐるしいすがたを見せてしまつた。

そのままにはしては置けない氣がするのだつた。彼は宿醉の惱みが、お君のまほろしで拂拭された。

清は身じまひをすますと、眞新らしい夏帽を冠つて出て行つた。近所の十字街の角に小さな小綺麗な唐物屋があつた。その前に立止まつて、しばし考へ込んだ後、彼は赤い函にはいつた香水を求めた。

人形町に着いた時、本田はどこへか出て行つてゐた。お君が危なかしい階段を下りて來たかれはやゝ青ざめたかの女の顏を一瞥した時、本田が留守だつたことが、何かしらうれしい氣がして、自分で頰がかすかに染まるのだつた。

『もうぢき歸つて來ますわ――圖書館へ行つて來ると言つてゐましたけど――。』

で、かれはいくらかためらつた後、かの女が導くまゝに二階の小部屋へ上つた。

かれは昨夜のことを佗た。お君はたゞ笑つてゐた。かの女は物しづかな、大人しい性格にも似合はず、カフェづとめの僅の時間の經驗から泥醉漢の心理はいくらか了解してゐるに相違なかつた。

『でも從兄さんが心配していらつしやいましたわ――。』

清はあかい香水函をかくしから遠慮深く取り出した。

お君の瞳がうれしげに輝いた。こんな娘が思ひがけなく、美くしい若々しい異性から、品のいゝ贈りものをうけて、心を躍らさずにゐられるだらうか――、

けれども、お君の小さな顏が、急にかげつた――かの女はかなしげな目付をした。

『でも、かういふものを戴いても――』

かの女は紅い函を手にしたまゝうなだれた。

『リリーですよ。お氣に召しませんか？』

『いゝえ、私、大好きですわ。でも折角いたゞいても――』

清は了解した――

貧しく、乏しく、着更への着物も持たないやうな境涯に落ちた娘が、舶來香水を手にしたところがどうなるであらう――この贈りものは、決してお君に向いてはゐなかつた。かれは當惑

した。

お君は、しかし、突然微笑をした――わざとらしいまで明るい微笑だつた。

『いゝえ、戴きますわ――、リリーは大好きな花ですもの――

清は淋しげな微笑を返した。

『有難う、君が受けてくれてうれしいのです。』

二人は話しの繼ぎ穗がなくなつて目を反けた。清は紙卷に火をつけた。

二人はくつろいで何か話さうとした。しかしそのくつろぎは中々來なかつた。お互にお互の生活に知識がなかつたから、何を話題の中心にしたらよいかわからなかつた。かの女はたつた今贈られた赤函の香水を、つゝましく坐つた膝の上で弄るやうにしてゐた。

『これからズッと本田君と一緒に暮らすおつもりなのですか？』

と、清がたづねた。

お君はためらつて、

『えゝ――從兄さんが折角深切にして下さいますから――でも、私、もうぢきまた何か働き口を見つけますのよ。あの人は當分暢氣にしてゐるがいゝと、言つてくれますけれど――』

『働くのは結構ですけれど――』

と、言ひかけて、清は、しかしカフェー奉公なぞは――とも、言ひかねて默つた。

『えゝ、私ももう矢鱈につとめ口を探すのに焦ることは止めましたわ。もうこれまでのやうなことは――』

と、お君が言つた。

すると、その時、ふと清の胸に思ひ當るものがあつた。かれが出入するある大書肆で、新らしい部面を開拓するために支店を設けようとしてゐた。その書肆の幹部とは。藤島がかなり懇意にしてゐるので、かれの手を通じてたのみ込んだら、この娘一人位はどうにもしてくれるだらうと思はれた。

かれは明るい口調で言つた。

『君は計算や筆記に自信がありますか？』

『いゝえ、自信なんかありませんのよ。』

お君は、しづかな微笑で答へた。

『でも他人さまのおやりになる事なら、一生懸命になつたら――』

『これは今思ひついただけのことで、まだ空いてゐるかどうかわからないのです。しかし新ら

しくある出版社の支店が設けられることになつてゐるので、その方を訊いて見て上げたいと思ふのです――若し、僕がそんなことをしてよければ――』

『まあ、そんな仕事があれば、ほんたうにうれしうございますが、是非どうぞ――』

『では、本田君の了解を得た上で早速當つて見ませう――』

――この會話が、若い男女の心を急激に接近させ、開放させた。二人はもう今までのやうにはにかんだり、遠慮したりせずに語り合ふことが出來た。

お君はしみじみとした口調で、昨日までの辛らかつた日を語るのだつた。

『――學生さんたちが、毎晩二時半頃までも御酒を上つていらつしやいますのよ。そしてすぐに喧嘩をおはじめになりますの。お皿を投げたり、コップを割つたりして――そんなことがなければ、私たちがいつまでもお酌をして、お店をやつと閉めて休ませて頂くころには三時半にもなつてゐますのよ。大てい白々と明てから寢床へはいるのですけれど――』

かの女は別に貞操上の危險や、その他のことについては觸れなかつた。しかしあらゆる誘惑の中にあつて、自分を守りとほして來たものだけが持つことの出來る誇りだけは、十分に讀み取れるのだつた。

清は、かの女に近づけば近づくほど讀むべき點を見出すことの出來るのが嬉しかつた。

5

――二人の話がいくらかはずんで來たころ、階段がミシリ〳〵と重たく軋んで、入口の障子がガラリと開いた。

本田だつた。彼は右脇に三四冊の洋書を剝き出しのまゝかゝへてゐたが、急いで來たと見えて、額に一めんに汗をかいてゐた。

『今、階下で聽いたよ――君が來てゐるつてことを――』

本田は犬變機嫌だつた。昨夜失態を見せてしまつた清は、本田から顏を合せ匆々、何か一文句出るのを覺悟してゐたのであつたが、相手は少しもそんなことにはこだわらなかつた。

『どうだね？、もう氣分はすつかり直つたかね？』

『ありがたう。すつかり直つた。』

清はいくらか紅くなつて答へた。

――お君は、この世でたつた一人頼りにしてゐる本田へは、何の羞じらひもなく、清からうけた香水函を示せるのだつた。

『それは却つて氣の毒をしたね――。しかし、この男はさういふ性分だよ、僕なんかと非常に

違つたところがあるんだよ。君は屹度この人と親友になるだらう――』

と、本田が微笑した。

お君はそこで、たつた今、清から聽いた仕事の口について話した。

本田はうなづいた――。

『さうかい？　そんな口があるなら早速手配をして貰ふ方がいいよ。僕もけふよそへたのんで來てあげはしたのだがね――何分今は人が多くつて職業口は少いのだから――なアに、君一人位當分遊んでゐても何でもないのだけど――』

事實、彼が今日圖書館へ行くといつて外へ出たのもお君といふ可愛い〻厄介ものを引き取つてしまつた以上、これまでのやうに暢氣にもしてゐられないと思つて、新らしい仕事をさがしに出かけたのだつた。幸ひ、ある書肆で飜譯家を求めてゐたから、それを受け合ふことが出來て、やつと氣が樂になつたわけなのだつた。正直のところ、お君のためになら、多少の煩ひをいとふわけではない。しかし、彼女としても、若いみそらでたゞノラクラしてゐるのも却て樂しくもないに相違ない――

清はもつとくはしく說明した。

本田はサッパリとお君の身の上を清に頼んだ。

『この子も賴りがすくないのだから、これからは君の力になつてやつてくれ給へ。』

『あゝ、いゝとも――出來るだけは――』

――そして、一種の安心が清のこゝろへ來た。今は二人を並べて見て、この從兄妹同志の間には、まだ不純な何ものもないのを見拔くことが出來た氣がした。

すると、彼は、お君のために思ひついた仕事の口が、かうしてゐるうちにもふさがつてしまひはせぬかと案じられて來た。

『僕はちよいと行つて見て來るよ、夕方までには何とか返事が出來るだらうと思ふ。』

清は本田の寓を辭して外へ出た。正午に近い日は、白い明るい光をカーツと初夏の街に撒きちらしてどこもかもが晴々としてゐた。

――僕も働かう。考へ込んでばかりゐたつて仕方がないんだ。

清は久しぶりで非常に快活な氣持になつて、藤島の家を指して電車をえらんだのである。

――清は急な阪路の上にある藤島三吉の玄關でベルを鳴らした。まだ正午ごろで、いつもサイレンを聽かずには床を離れない藤島が起きてゐるかどうかが疑問だつたが、出て來た女中は清の顏を見るとすぐに笑つた。

『いゝえ、今日はいそがしいと仰有つて、もうさつきから机に向つていらつしやいますよ。』

清は恰度いゝことに思つた。朝寢坊で名高い藤島のことだから、今時分たづねて來る友人も記者たちもあるはずがなかつた。お君の一身上の問題を相談するには、相客がないことはなにより好都合だつた。

清は馴れ切つた階段を上つて、藤島の書齋へはいつて行つた。非常な高臺で、お濠越しに麴町一帶を一眺めに見下すことの出來る部屋の眞中に大机を据えて、藤島三吉は萬年筆を走らしてゐた。彼は遠慮深く坐つた清をチラリと眺めると、ひどく早口でベラ〳〵と云つた。

『あゝ、君か？　昨夜は失敬――、あれから僕たちは明方まで飲んで別れたんだ――今、新聞物を一回かいちまうから、ちよいと待つた……、もうあと十分位ですむよ。』

さう云ひすてると、長い指で摑んだ萬年筆を、無造作にスル〳〵と運ばせつゞけた。

あの男は、いつ物を考へ、いつあれだけに澤山な製作するのだらうと、世間では怪しむものもあつたが、事實、清のやうに藤島に接近してゐるものでも、この作家がちんとした構想を立て、觀念を抱いて物を書いてゐるかどうかといふことは疑はしかつた。たゞ紙に向つて出鱈目を書きなぐつてゐるのではないかと思はないわけにはいかなかつた。

清は彼のペンの動きをながめながらじつと座つてゐた。

『さあ、出來たぞ……』

藤島は上機嫌で叫んで、カチリとペンを置いた。そして出來上つた原稿を讀み返しもせず、茶いろの封筒に叩き込むやうに突ッ込むと、

『これでいゝんだ。』

自分に言ふやうに藤島はふたゝび叫んで、グルリと清の方へ膝を向けかへた。

『馬鹿に疲れた顏をしてゐるぢやあないか？』

ジロリと彼の目が清を見た。

清は今朝まで飲みつゞけてゐたといふ藤島が平氣な顏で机に向つてゐるのに、自分が昨夜あんなに醉ひ疲れてしまつたのを考へ出して、一種の屈辱を感じた。

『君は何だか元氣がないよ。若い癖に駄目だなあ。』

『昨夜少し苦しんだのです。』

と、彼は正直に白狀した。

『いけないよ。しつかりしなきゃあ、鍛練するんだな……頭もからだも十分に鍛練しなきゃいけないんだ。』

藤島は清に逢ふたびに（鍛練）を說くのだつた。彼のいはゆる鍛練とは、酒にも、女にも、

生活にもどんなにでも打突つて行つて、燒かれず溺れぬ性格をたゝき上げろといふのにあつたからつまり圖々しく、いけしやあ〳〵とした生き方を生き拔けといふのに外ならなかつた。

『僕なんぞは、鍛練してゐるうちに、燒けたゞれてしまうかも知れません』

と、彼は苦笑しながら答へた。

6

……藤島は盛んに紙卷の煙をふかしながら、清の顏を眺めつゞけた……

『一たい、こんな時刻にやつて來るのだから、何か特別な用事があるに違ひないが、戀人が出來たとでもいふやうな知らせを持つて來たのかね？』

……パキリと彼は言つた。

それは清をして、顏を紅らめさせるに十分だつた。まるで見當はづれだといつてもいゝが、その癖、すつかり暗合したともいへばいへるのだつた。清はお君に戀を囁きはしない……まだ夢を語りもしない……しかし、彼女のためにわざわざ仕事の口を見つけてまはつてゐるといふ事實そのものが、單なる好意からだと言ふべきであらうか？。

『こいつあ、多少適中したらしいね？　ハ、ハ、ハ、ハ、。』

藤島は手ひどく笑つた。

清は話の先つぽを折られてちよいと當惑したが、勇を鼓して言ふのだつた。

『いゝえ、そんなわけじやあないのですが、本田にゆうべあれから偶然逢つたのです……すると、大變苦勞してゐる從妹を世話をしなければならなくなつたといふので、ちよいと困つてゐるやうに思はれたものですから……それで、思ひついたのですが、例の東京出版社の支店が出來るといふことを、先生から伺つてゐたので、女事務員の口でもまだ殘つてゐたらと思ひまして……』

『フウム。』

と藤島は嗤ふやうな目付で、今よりも一さう强く清を眺めた……

『フウム、それは結構な思ひ立ちだが、しかし、少し變だなあ。』

清は默つて見返した。

『ねえ、君、變じやあないか？』

『なぜでせう？』

『なぜつて君、本田が從妹をあづかつて困つてゐるなら、本田自身が心配して驅けまはるべきじやあないか……』

清はハツとした。藤島の苛辣な言葉は、ヅキリと彼の胸を突いた。彼はヘドモドした。しかし、相手は、すぐに追究をゆるめた……

『ハ、ハ、ハ、ハ、まあ、いぢめないで置かうよ。本田の姉妹と君とが、たとへ戀に落ちたつて不自然なことぢやあないんだ。』

萬事、手ッ取り早く事をはこぶのがすきな藤島は、もう萬年筆をにぎつて原稿紙へ紹介狀を書きはじめてゐた。

『出版社の神田支店長は、今度大阪から來た男で、君は知らない人物だ！　これを持つて、その娘さんと一緒にたづねて見給へ！　ときに、その娘さんといふのは美人かね？』

チラリと、彼の目がいたづらさうに微笑んだ。

『紹介狀を書かせるなら、その美人に引き合せて置くのが順當だがなあ！』

――いかなる皮肉が言はれたにもせよ、藤島からの紹介狀が手にはひつたことは、有利にきまつてゐた。彼は追擊をおそれてすぐに書齋を辭し去つた。

彼が直ちに引ッ返したのは本田の寓だつた。

『藤島さん、家にゐたかい？』

と、本田が言つた。

『あゝ、珍らしく朝起きて原稿を書いてゐたよ……紹介狀を貰つたからお君さんを借て出版社支店へ行つて來ようと思ふ。』

彼は着更へをして、出來るだけこざつぱりとしたお君を連れて外へ出た。二人で歩くといふことが樂しかつた。

東京出版社支店は神田ビルディングの五階にあつたが、そのドアの前に立つた時、お君は呟やいた。

『私、胸がドキ〳〵しますわ。』

――お君は孔房のあたりを片手で押へた。

『私、怖いやうな氣がしますわ。』

『何でもありはしませんよ。』

清は受付に近づいて、藤島から貰つて來た支店長あての紹介狀を差し出した。二人はすぐに應接間に通された。

應接間と言つても、まだ開店早早のことで、テーブルや椅子もさう揃つてはゐなかつた。來客達はめい〳〵に佇んだり、腰をかけたりして、係々の人達としやべつてゐた。

二人は遠慮深く壁際に立つてゐた。

やがて、中央のテーブルで、三人の男たちと話してゐた、三十二三の、さも敏腕らしい目顏をした紳士が、相手が席を立つと間を置かせずに言つた。

『吳芝さんはどなたです？』

しかし、紳士の目はもう清たちの方へそそがれてゐた――彼は封を切つた藤島の手紙をかんでゐた。

清はお君をうながすやうにして近づいた。

『僕がここをあづかつてゐる林田です。藤島さんの紹介でいらしつた方々ですね？　まあ掛け給へ。』

テキパキと、彼はこんなことを言つて、前の椅子を指さした。

『どうも職業を求めて來る方が意外に多いので驚いてゐますよ――タイピストを三人必要だと考へてゐましたら、五十人もやつて來ました。で、もう有利な位置は一ぱいですが、しかし滿更もう女の方を要さぬといふのでもないのです。で、お望みはどんな方面なのですね？』

彼はかう言ふ間も、お君の方を鋭い目で、しかし微笑みをうかべながら、ジロ〳〵と觀察してゐた。

清はこの紳士が、驚くべき敏腕な、油斷も隙もない人物なのを見て取つた。東京出版社はこのすばらしい新重役を得て、いよ〳〵尖鋭な商戰を進行せしめるだらう――。

『別にこれといふ希望もないでです。』

と清がお君に代つて言つた。

『非常に不運で、何かして、獨立しなければならない身體なものですから……僕の友人で、藤島先生の後輩の本田といふものゝ從妹ですが……ですから、身の上だけは確實だと言つてもいゝと思ひますけれど……』

『そのことは藤島さんの手紙にも書いてあります――ほかならぬあの人のお賴みですし、ぢやあ、何といふことなしに、雜務の助手として明日からでも來て見て下さい。またその上で、何をお願ひするか當方できめますから――』

『有難うございます。何分――』

お君は無言ではあつたが、それでも嬉しげにお辭義をした。

『しかし。』

と、支店長は早口でいつた。

『しかし、この時世ですから、とても十分な報酬を差し上げることは出來ませんよ。晝飯をこ

ちらで上げて、二十五圓――それで當分御辛抱を願ひたいのです。』

二十五圓が二十圓でも、今のお君にとつては否やをいふことは出來なかつた。

二人は早速聽き入れてくれた支店長に、心からの感謝をいだいて出版社を出た。

ビルディングの外は、いつかもうたそがれだつた。清はこのままお君と別れてしまうのが惜しまれてならなかつた。彼は街路樹の綠りばを吹く夕風をながめながら、遠慮深く言つて見た。

『涼しい夕方ですね――少し歩きませうか？』

7

――二人は夕かげが、涼しい灯と綾を作りはじめた歩道を歩みつづけた。もうソロソロ散歩客の出はじめるころで、若い男女は何の屈托もなささうにもつれ合ひながら往つたり來たりしてゐた。

清は長いこと苦しい寂しい日をすごして來たお君に、二人でゐる間だけでもしづかな樂しみをあたへたく思つた。そこで、小さな紫いろのカフェーの前まで來た時誘つて見た。

『何だか咽喉が乾いて來ましたね、コーヒーを飲んでゆきませう――どう？』

お君はうなづいた。彼女は彼に依つて思ひがけない職業を得たので、心からたのみにすれば

おのづとしたしみを感じてゐるに相違なかつた。

カフェーは、喫茶を主としてゐて、他の類似の家で見るやうな喧燥は發見されなかつた。二組三組の客が、つゝましく白いテーブルに向つてコーヒーを啜りながら話してゐた。

二人は一ばん隅の卓に坐つた。

清はお君とかうした場所で向ひ合つて、はじめてつくづくと彼女を押し浸してゐた貧しさ乏しさを見出したやうな氣がするのであつた。彼女の單衣は、着更へもないことゆえ大分萎えしほれて、帶はいくらかヨレ／＼になつてゐた、そして足袋は大さう黑ずんでゐた。

このまゝでは、明日からのつとめにも差しつかへよう――。

と、彼は心に呟やいた。

彼は折よく一編の小說をある雜誌に賣りつけたあとで、まだポケツトがそんなに輕くはなかつた。だから、すぐにも彼女のために銘仙もの位なところで、身なりをととのへてやることは出來るには出來た。けれども、それを直ちに贈りものにするには、本田に對してもある氣兼がされた。

『君も、あしたからは立派な職業婦人ですね。』

と、わざと快活に彼は言つた。

『え？　まあ――』

と、お君は顏を紅らめた。

『多少つらいことがあるかも知れませんが、なるべく辛抱なさい、――その中に何かいゝことがあるでせう――僕たちはいつまでも不幸でゐるとも限らないのですから――』

『いゝえ、どんなに苦しかつたつて、これまでのことに比べましたら――』

お君は思つても哀しいといふやうに呟いた。

二人は一碗のコーヒーを飲んだ。一皿の菓子を食べた――尤も、お君はほんの一つのアップルパイをつまんだきりであつたけれども――

『さあ、本田君は早く結果をはなして喜んで貰ひませうかね？』

二人はカフェーの外へ出た。

もう樂しい涼しい夕闇が、すつかりあたりを押しひたした。

二人は肩をならべて電車停留場の方へ行つた。

本田は大童になつて机に向つてゐた。彼は二人がはいつて來たのを見ると、ギヨロリと見上げた。

『成功――、』

と、清が元氣よく行つた。

『そりやよかつた。』

三人はこま〳〵と話し合つた。本田も氣のつかない男ではないから、財布を叩いても、就職のお祝ひに、お君のためにレデイメードの洋服をとゝのへてやることを約束した。

清は安心した。

お君は生れてはじめて幸福に逢つたものゝやうな表情をしてゐた。

——清は本田がすゝめてくれるまゝに、三人で牛鍋をつゞついたあとで、あまりいつまでも長座するのが、友人に胸の中を見拔かれるやうな氣がするので辭し去つた。彼は今夜のやうに氣も心も輕く樂く家路につくことはないのだつた。あの貧しい娘に職業をあたへてやることが出來たといふ事實がまるで鬼の首でも取つたやうにうれしかつた。微笑が唇にうかびつゞけて消えなかつた。

——あれで、だん〳〵あの娘に幸福になるのだ——ああいふやさしいよい性格の娘が、いつまでも不運の底に沈んでゐなければならぬといふ不合理なことはないはずだもの——

清は、アパートの一室に歸つてからも、いつものやうに書物をひろげたり、原稿紙をのべたりするやうなことは忘れて思ひつゞけた。そして、何もせずにじつと考へ込んでゐても、その對象が彼の女である限り、すこしも退屈もしなければ、淋しくもなかつた。

——だが、突然、彼は心に叫んだ。

——これが戀かしら？　こんな素直な戀に心を奪はれる資格が僕にあつたのかしら？

彼はむしろびつくりするのだつた。彼は決して清純な青年と自分をいひ切ることは出來なかつた。不純な先輩達を持つたためもあつたらうし、また自分の性格の弱さに原因もしたらうが隨分けがらはしい世界に足を踏み入れて、魂の自をそむけつゝも、肉體の瞳を濃化粧や青白い肌に吸はれたことがないではなかつた。

彼が、これまで、戀をしたと思つた女性が、三人や五人でないことも事實だつた。

反省は彼を絶望的なものにした。

——僕は駄目だ！　お君ちやんのやうなしほらしい娘を戀する資格なんぞは僕にありはしないい——

彼はまた思ひ出すのであつた。ある一夜の過まちから、呪ふべき病氣をさへも受けてしまつたことがあつたのを——それから泥醉の部果、目がさめて見て、これまで一度も逢つたことのない異性の腕の中にゐるのを見出したことがあつたのを——

どれもこれもが、みにくい――過去であつた。

――お君ちやんが僕の過去をすつかり知つたらどんなに卑しむだらう――本田が何かの拍子で、何もかもあの娘にしやべつてしまつたら、どんなに蔑みの目で眺めるやうになるだらう――

彼は自分のからだを荒砥にかけてけづり落したくなつた。しかしいかに削ればとて、到底二度と清らかにはなり得ぬものゝやうな氣がされるのだつた。

けれども、やがて彼は思ひ直した。

――あの人が、僕の戀を入れてくれるなら、きつと宥してくれるだらう――さうすれば僕はよみがへる。もう二度と、先輩たちが住んでゐるやうな穢らはしい道へ足を踏み入れやしない。

彼の目に、昨夜の今ごろのことが浮ぶのだつた。そして今夜も又昨夜と同じやうなことを、藤島やその他の人達がやつてゐるのを、マザ〳〵と目に描くことが出來るのだつた。

――何といふけがらはしさだらう！

彼は戰慄した。そしてどんなことがあつても、二度とああした世界へは足をふみ込むまいと決心するのだつた。

いつか十二時近くなつてゐた。彼は新しい昂奮と希望とにつき進められて、書きかけの小說のペンを執り上げた。

新らしき日

1

――その翌日は、相變らずカラリと晴れ上つた、稍風の荒らかな日だつた。

お君に取つては、恐らく今日ほど日本晴れした氣持をしたことはなかつたらう。つとめと言つても今までの場末のカフエー廻りは、言はゞ、人前で大きな聲では言ふことの出來ないやうな、暗さとみぢめさとをもつた生活だつたが、今はすつかり彼女を蔽ひかくしてゐた、あの低い壓迫的な雲は遠くへ吹きのけられてしまつた。今日からの彼女は、東京でも有名な大出版社の女事務員だつた。一ばん文化的で、一ばん明るい職業だつた。

彼女は品こそ上等ではないものゝ、淡灰色の、涼しげな服をつけ仄青いパラソルをかざし、茶色の靴を穿いていそ〳〵と街路を電車停留場の方へ歩いてゐるのだつた。膝の少し下まであるスカートを、荒つぽい風が來て吹いて行つたがその風までもが、自分によろこびの挨拶をしに來たかのやうに思はれるのだつた。

——從兄さんが言ふ通り、一生懸命はたらきませう！

彼女はつぶやいた。本田は、出がけの彼女を、階段の下まで送つて言つたのだつた。

『働らくんだよ、すぐに職業がみつかるなんて、君ほど運のいゝものはありはしない。その運に對しても働かなくては濟まないぜ！』

——ほんとうに、働らかなくてはすまなかつた。あんなに骨折つて、彼女のためにつくしてくれた清に對しても！。

——何て深切な方でせう！、吳芝さんといふお方は！。

で、彼女は思ひ出したやうに、白いハンケチを取り出して匂ひを嗅いで見た。

すると、ほんのりとなつかしく清からの贈りものゝリリーがかほつた。

——いゝ匂ひ！　何てすが〳〵しい匂ひでせう！

黄色く光る電車に彼女は乘つた。電車は風に追はれながら輕くはづみをつけて走りつゞけた。

勿論、彼女にも、さうした仲にも多少の懸念や不安はあつた。何分にも、彼女としては全然知らぬものばかりが集まつてゐるところへ出かけて行くのである。そこで働かうとするのである。昨日清に連れられて行つた時に、應接間からチラリと眺めた事務室の中の光景が——さまざまな人物の顏がうかぶのだつた。どれもが、別に意地惡さうでもなかつた——しかし彼等の

全部が、果して自分を易々とうけ入れてくれるであらうか？

彼女の瓜實顏に陰影がさした。けれども、さうした薄暗さは、いつまでもつゞいてはゐなかつた。

『働くんだよ！』

と、力をつけてくれた一郎の言葉がまたよみがへつた。彼女はふたゝび清からの贈りものゝ香水の匂ひを嗅いだ。すると、勇氣が湧き、望みがあふれた。

——さうだわ、働けばいゝのだわ。私は働くために、雇はれたのだもの——

そして、若々しい意氣を以て、どんな困難なことでも。苦痛なことでも、やればやり拔けるに相違ないと自分に言つて見た。

——私、辛抱するわ——辛抱出來なかつたら、從兄さんがどんなに力を落とすでせう！

もうビルデイングに近い停留場についてゐた。彼女は、とつくに電車を捨てたのだつた。

——お君は出來るだけ元氣のいゝ態度で、事務室のドアを押した。

出勤時刻よりやゝ早目だつたが新店のことで、みんな緊張してゐると見えて、もう大分顏が揃つてゐた。支店長も自分の部屋から出て來て正面の大デスクに頑張つて二三人の社員を相手

に何やら大聲で命令してゐた。

『じやあ、わかつたね？　小野木君は大阪方面、泉井君は東北方面、博多君は九州方面――手落ちのないやうにたのんだぜ。新店のお得意廻りといふものは、なか〳〵六かしいものなんだ。君たちの手腕に待つぜ。』

さうした話がすむのを待つて、お君は近づいてお辭儀をした。

『おゝやつて來ましたね？』

支店長は前齒をちよいとあらはにして笑つた。

『本田？――たしか本田君子さんだつたね？　君はけふから手紙の發送に廻つて貰ふのだ。おい、池永君！』

室の一隅から

『はい。』

と、いふ活潑な聲がきこえて、二十七八の紺背廣の男が、支店長の方へやつて來た。

『本田さん、これがけふからの君の課長さんだ。池永さん。本田きみ子さん。』

と、支店長は二人を引合せて、

『これから大いに働くさうだから池永君よろしく賴む。』

『じやあ、こちらへいらつしやい、手が足りなくつて困つてゐるのです。』

池永と呼ばれた男は、お君を自分たちのデスクの方へ導いた。ひとつの長い卓には、二人の部下がワイシャツひとつになつて印刷した書簡へ、宛名を書き込んでゐた。いづれも若盛りの潑溂たる青年だつた。

池永は、この二人にお君を紹介した。そして、堅い丸椅子のひとつを指して、

『そこが君の席だ。ペンも筆も自由に使ひたまへ。そしてこの人名簿の『カ』の部にある連中のところへ、中味へも、封筒へも宛名を書いてくれゝばよろしい。なるべく字を崩さずに、さも丁重さうに――ネ、開店の挨拶狀なんだから、そのつもりで――』

お君はこれで完全に職を得たのだつた。かの女はいはれるまゝに筆を執つて、墨汁をふくませた。そして書きはじめた。

けれども、こんなやさしい仕事でも、最初はなか〳〵うまく行かなかつた。手がぶる〳〵ふるへて、たれか見てゐるやうな氣がした、恥かしかつたり恐ろしかつたりしたが、それがやつと止まると、今度は字の太いのが氣になつたり細すぎてヒヨロ〳〵するのが氣になつたりした――こんなつとめにつくと知つたら、お習字を十分にしておくのだつた。

と、かの女はつぶやいた。

しかし、決してお君は手が悪い方ではなかつた。

『どれちよいとお手並を拜見しようかな？』

と、課長はいつた。

『結構、大出來。』

お君は、紅くなつて、そしてホッとした。

――おひる休みに、かの女ば手洗場の鏡の前で、自分にはなしかける一人の女性を見た。

『あなた、けふから自社へいらしつたの？』

二十二三の、背の高い、淡青い服にかかとの大さう高い靴を穿いたひとだつた。そのひとはコンパクトを取り出して、一生懸命顏を叩いてゐたのだつた。

2

コンパクトで顏を叩きをはつた女性は、自分の名を名乘つた。

『私、浦路なみ子よ。タイピスト。』

で、お君もおづ〳〵名乘つた。

『私の方とあなたの係りとは極めて連絡があるのよ。だから仲よくしませうね。』

浦路なみ子――恐らく匿名に違ひない女優のやうな名を持つた女は、棒紅を骨めた。

『えゝ、どうぞ。』

『歸り一緒に散歩しないこと？　今日、私、買ものに銀座へ出るのよ。』

お君は本田を安心させるために一刻も早く今日は歸りたかつた――しかし、返事をためらつてゐる中に、相手はつけ足した。

『ね！　いゝでせう？　歩きませうよ――いま頃の銀座、そりや美しいわ。』

それだから、お君は、それに背くことは出來なかつた。

『いゝ、どうぞ、お供いたしますわ。』

彼の女は約束してしまつた。

『じやあ、屹度よ。』

『えゝ。』

なみ子はさつた。

お君もザッと顏を叩いた。そして廊下へ出た。

ビルヂインの晝休みの廊下の角々は、若い青年達でにぎはつてゐた。勿論、ある組には出版の若手連がたゝづんでゐるのだつた。お君はまだ後すがたを見覺えることもしてゐなかつたの

で、つい、その側を會釋もせずに通りすぎた。

『ホウ、なか〳〵美しいね――』

と、だれかゞ囁くのが聞えた。

『泉井君、あれは君のデスクだらう――うまくやつてるぜ。』

『歸りにビールを拔く必要があるよ。君ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。』

お君ははづかしさに眞紅になつて、いそいで事務室の方へ行つた。

まだうしろの笑ひ聲はつゞいてゐた。

『いづれにもせよ、見るは目の法樂といふ言わざもあるじやあないか――ビールの必要は十分だよ。』

お君は別にはづかしめられた氣もしなかつた。しかし何となくゐたゝまれなかつた――事務所へはひつてゆくのさへはづかしかつた。

彼の女はやつとデスクに落ついた時、あたりに人がゐないので、ひとりごちた。

――私、美しくなんぞありはしないわ――、ちつとも美しくなんぞありはしないわ！けれども、何となく、撫でられ媚びられるやうなよろこびが感じられもした。どんな輕い冗談口が自分を中心にして語られるにせよ狀態はまるでこないだまでの、あのカフエでの、それ

とは違つてゐたみんなは若々しく、生々しく働いてゐた。そして何の邪念もなささうに感じられるのだつた。

彼の女は仕掛けてある仕事をひろげた。筆がなめらかに封筒の上ですべりはじめた。

『そんなに働かなくてもいゝのですよ。君』

と、たれかゞうしろで言つた。

ふりかへると池永だつた。

『大勢の中の仕事は、一人で働いてもつまらないのです。みんなが休んでゐる時には休む方が得ですよ』

池永はデスクを廻つて、彼の女と向き合ふやうに自分の椅子に座つた。

――時々、なまけたり、雜談したりしながらも、仕事はだん〳〵に捗取つてゆく。みんなが遊び半分だか、それとも眞面目なのだかわからないやうな顏をしてゐたが、さすがに場馴れた連中と見えて、その中でするだけのことをしてゆくのであつた。お君は感心しながら、一日も早く、自分もさうした熟練境に達したいと思ふのだつた。

仕事は毎日五時に濟むことにきめてあつた。その時刻がくると、だれも遠慮してゐるものは

なかつた――サラ〳〵と、帳簿や紙類をしまふ音がして、そしてみんなは立ち上つた。男たちは肩や袖口のチリをはぢいた。女たちは手洗場へ行つて、顔か叩いたり帽子をかぶつたりしたお君は支店長に別れの挨拶をしようと思つたが、例によつてまだ應接間で元氣な聲でしやべり立てゝゐる容子なので止めにした。

部屋の出口で、かの女ば浦路なみ子と落合つた。

なみ子は階下へ下りながら、さも親しい友だちのやうに、お君の肩へ手をかけた。

『どう?』

と、かの女はのぞき込むやうにした。

『どう?　辛棒が出來さう?』

『えゝ、使つてさへ下されば――』

と、お君は遠慮深く答へた。

『そりや大丈夫だわ。あなたのやうにすれてゐない方を、會社で大事にしないはずがないもの――私保證してよ。』

――さうか知ら?　と、お君は思つた。かの女はうれしかつた。

『私なんかだつて、ほかの女たちはみんなきらひよ。他人のことばかりジロ〳〵見てゐて、仕事なんかすこしも精だしはしないわ。もつとも私だつて――』

なみ子は、いひかけて、ホ、ホとずるさうに笑つた。

『私だつてみんながなまけてゐるのに獨りで働くほどお人好でもないのだけれど――』

男社員達は、元氣よく階段を降て行つた。二人を追ひこす時には、それでもめい〳〵帽子のつばに手をかけてゆくだけの禮義はまもつてゐた。

『今、あそこへ行つたでしよ?』

と、なみ子は囁いた。

『あたらしい藁帽をかぶつた人――いやな奴よ。本社の專務の甥だつてサ――』

と、なみ子が、いひかけた時、當の相手がちよいと立ち止まつてかくしを探つて紙卷に火をつけた――みんなはビルディングの出口に來てゐた。そして、二人が近づくと、彼はなみ子とお君を見くらべるやうに振り返つた。

なみ子は何か物いひたげな相手に、ツンとして態度で腰をかゞめて通りすぎた。

『あいつは浮氣ものよ――女たらしよ――もうこのあたらしいみせが出來てからでも――』

なみ子は默つた。二人は少しあるいて、電車におし込まれて、銀座でおりた。

美しい夕方だつた。まだ夕日があかるく流れて、紅白のだんだらの日よけで蔽はれた歩道を

一日の仕事から開放された若い人達がさも浮々と、ダンスを踏むやうな足どりであるいてゐた

『私はこゝが好きサ。』

と、なみ子は蓮ッ葉に叫ぶやうにいつた。

『夕方の銀座ほどおもしろいものはないことよ。いろんな人達が通るでせう――ごらん、もう社の秘書が、あゝいふ女をつけてあるいてゐてよ。』

3

――なみ子が指さしたところに成程今日會社で顔を見覺えた一青年が、淡紫いろのスカートが膝ッ切りな娘をつれて、腕に觸れ合ふやうにして歩いてゐた。五間ほど先きを何か囁き合ふやうにして歩いてゐた。

『まあ！』

と、お君はつぶやいた。一種の驚きが襲つた。

『こんな明るい中に、大膽不敵な人達ねえ――いゝわ、あした、みんなのゐるところで素ッ破抜いてやるから――』

なみ子は憎々しさうに笑つた。そして、突然あたりを見まはした。

『アラ、あの人達を見てゐるうちに、用のある店を通り越してしまつたわよ。』

二人は少し引ッ返して、とある化粧品屋にはいつた。お君は名高いこの店の名を始終耳にしたり新聞廣告で讀んだりしてゐたが、足をふみ込んだのははじめてゞあつた。明るい美くしい灯でキラ〳〵と飾られた店内には、けば〳〵しいなりをした娘や、しとやかさうな夫人達が、何十人となくたゝずんで、賣場の係を相手にべちやべちやとしやべつてゐた。

なみ子は大さう高慢な目付で、賣り子をまねいた。彼女はだしぬけにひどく背のびをしたやうに丈が高くなつた。

彼女はさま〳〵なものを並べさせた。香水、化粧水、おしろひ、マニキュア一切、そのほか十品近くも買ひものをして、四十圓近い支拂ひを平氣でするのだつた。

お君はさもしい氣持でのぞいたわけではなかつた、わざと見せるやうに相手がして見せるので、思はずバックの中に、なほ且つ數十圓の餘裕があるのを發見した。

――まあ、この方は何てお金持なんだらう――

と、お君は吐息をついた。

『あなた、何か買ひものをしないの？』

お君は頬が熱くなるのだつた。

彼女は本田が乘車券を買つてくれた外、萬一の用意として三圓だけ錢入れに入れてくれたゞけだつた。おしろひ一瓶買つても、あとに殘りがぽツちになつてしまうのはわかつてゐた。

『え？　ほしいものはないこと？』

と、なみ子はつゞけた。

『何なら――』

と、彼女はお君に囁くのだつた。

『私、おはらひしておくことよ――今日、私、隨分お金もちなのよ。』

『いゝえ、いりませんわ、何も。』

と、辛うじてお君は答へた。

『じやあ、私、おくりものをしてよ。あなたに――私たち、今日からこんな親しいお友達になつたのじやあないこと？　私だつて、あなたにお世話になることが、これからいくらもあるわ』

なみ子は化粧水や、おしろひや紅や色々なものが一緒につまつてゐる小函を買つて、それをお君の手に渡すのだつた。

お君はいなむことも出來なかつた。

『ありがたう。』

『いゝえ、そんなにお禮を言ふには及ばないことよ。』

と、なみ子は言つた。

『そのかはり、私またいろ〳〵おたのみすることもあるのよ。』

彼女はそれを通りへ出てから繰返した。お君はなみ子に更に飲みものを御馳走になつて別れた。

――なみ子がなぜ自分に親切にするのか、お君にはとつくりとのみこむことが出來なかつた。

――三四日するうちに、お君は大分仕事に馴れて來た。顏馴染も多く出來て、遠慮深く默り込んでゐる彼女へも、何かと話しかけて口を開かせやうと力めるものも出て來た。

彼女は樂しくないことはなかつた。單調無味な仕事も慾のすくない彼女は別に不平を覺えるでもなかつた。この分なら長くつとまりさうだと安心することが出來た。

ある午後だつた。卓上電話のベルが鳴りひゞいて、だれかゞ元氣な聲で彼女に呼びかけた。

『本田さん、吳芝といふ方からお電話ですよ。』

お君はペンを擱いた、歡びに胸が躍つた。

――まア――

彼女は心に叫んで、電話のあるデスクに行つて、電話器を取り上げた、なつかしい聲が、遠くから話しかけた。

『――おはがき有難う、仕事がお氣に入つたさうで、僕もよろこんでゐるのですよ。』

――彼女は手短に禮を言つた、すると、清は何となくせつかちに語りつゞけるのだつた。

『――僕ネ、今、會社の近所へ來てゐるのですよ、それでもうぢき退けるやうなら、どこかでお目にかゝりたいと思ふのですが――たしか五時退けと思ひましたが。』

――勿論、彼女は承知した。

『じやあ、神保町の角で待つてゐますよ。なるたけ早くいらつしやい。』

退けの時間には、あと三十分あますばかりだつた。彼女は電話を離れると、何だか仕事が手につかなくなつてしまつた。いつに無く書き損じさへしてしまふのだつた。

しかし、たうとう五時になつた。

彼女はあたふたと仕事をしまひ顏を直すひまも惜しんでビルディングを飛び出した。神保町までは三四町――その道をほとんど驅けるやうにいそぐのだつた。

彼女は生れてはじめて、最も信ずべき他人として、清を知つた。

――彼女は彼のやうに澄み切つた瞳の持主を、これまで知らなかつた。同時に、何等の危惧

もいだかずに交際の出來る青年を、彼以外に持たないのだつた。彼女は彼を、この世で一ばん信ずべきものにいつか思ひはじめてゐた。

恰度退けどきで、停留場はこみ合つてゐたが、お君はすぐに、その人ごみの中で清を見つけてしまつた。清は向ふ側の、街路樹の茂みの下に、新らしい夏帽子を冠つて立つてゐた。

二人の眼がたちまち合つて、微笑み合つた。彼女は電車道を駈け越えて、お辭義をして汗を拭いた。先方がひどく親しみに充たされてゐたので、どちらからともなく二人は手を握り合せてしまつた。

『いそいで〳〵來ましたのよ。熱くつてたまりませんわ。』

『でも、大變元氣さうに見えますよ。血色だつて隨分よくなりました。』

『さうですすこと？』

と、お君は羞づかしさうに笑つた。

『ちつとも辛くはありませんの。一生懸命勉强してゐますわ。』

『結構です。僕も安心しました。』

立ちばなしはそれだけだつた。

二人はどこをあてもなく歩き出した。

4

――二人はあてもなく歩き出した。清はお君を自分の右へ立てゝいつか二人の肩は擦り合ふばかりになるのだつた。

清は本田の勉強ぶりをたづねたお君のはなしでは、彼の飜譯はどし〳〵進行してゐるのだつた。

『半月で一冊譯し上げるとか言つてゐましたわね。このごろは、おひげもそらない位なんですのよ。』

と、お君は微笑した。

『あの男は、仕事をやりかけると詰める力だから――』

と、清は答へた。

『よくからだが續くと思はれる時がありますよ――僕なんかにはあの精力はない。』

清は體力の點ではいつも本田に羨望を感じてゐた――本田のハツキリした生活態度は、つまりは健康から來るやうに思はれるのだつた。

しかし、現在の清は、彼も亦なまけてはゐなかつた、お君といふ娘の存在を認識して以來、

彼はこれまでとはひどく違つた氣持になりはじめた、毎朝目が醒めるにもハリが出來、仕事をしてゆくことにある特別な意味を持たせて考へることが出來るのだつた。彼は新らしい長篇小說に手をつけかけてゐた、書き上げて、出來が惡くなければ、藤島が懇意な雜誌社へ紹介してくれるであらう――その曉には、生活の基礎が確立する、もう小遣に困つて古本を賣つたり時計を質入れたりすることは要らなくなるだらう。先輩達から記錄の書き拔きや口述筆記の仕事を貰つて、辛らうじて月末を越すやうな必要もなくなるだらう。

彼は今度の長篇は、少くとも藤島から叱られるやうな出來ではないことを自信してゐる。たしかに相當に讀めるものだと考へてゐる――材料はありふれたものだつた――彼はお君からヒントを得て、貧しい一工女に戀する一青年を書かうとするのだつた――しかしたしかに實感の生々しさを添へることは出來るに相違ない。

で、彼は氣が輕かつた。一週間程前にある雜誌へ賣つた短篇小說の原稿料が、まだかくしに殘つてゐた。質素にしてゐれば、優にこの一月をくらすことが出來るのだつた。

そして、同時に、もはや彼は藤島たちのあの亂雜な生活から完全に離れることが出來るやうな氣がして來た。彼はお君が無事に入社したことを禮ながら報告に行つたが、その時には藤島は留守だつたので名刺をのこして來たまゝ顏出しをしなかつた。

——藤島さんはあんまり無沙汰をしたらおこるかも知れない。でも、仕事をすればあの人はよろこんでくれるのだ——

と、自分に言つて見るのだつた。

——二人は、いつまでも歩いてゐるわけにもいかなかつた。二人は有名な活動寫眞館に近いところまで來てゐた。

『活動へはいつて見ませうか——獨逸の新女優が、大變な評判ですね。』

と、清が言ひ出した。

『えゝ、お供しますわ。』

と、お君はためらはずに答へた。

清はうれしげにうなづいた。寫眞館の切符賣場へ彼は歩み寄つた。

二人はすつかりカーテンを下した眞暗な二階へ案内された。

眞暗な觀客席の内部は、座褥を張りかへたばかりと見えて織物の匂ひが立ちこめ、それに婦人客の髪の香、香料のかほりがまじつてちよいと息苦しい位にさへ感じられた。二人は額が輕く汗ばむのを覺えながら椅子にすはつてスクリーンをみつめた。

新女優ケテーを賣ものにしたその映畫は、新らし味が一ぱいだといふよりも寧ろ甘たるい感傷に勝つたものだつた。恰度はじまつたばかりのところなので、二人もすぐに筋を了解することが出來たが、ケテーが紛する娘は、ある亂暴な職工の娘だつた。母親はとうに亡くなつて、父親の酒色のしろのために酒場に住み込み、そこであらゆる誘惑に虐げられるのである。しかし彼女には、いかに父親のためとは云へ、からだや心まで賣ることは出來なかつた。

悲劇はそこからはじまるのである。

暗澹たる畫面の動きを見てゐるうちに、清はこの映畫はお君に見せるにはあまりに向いてはゐなかつたのを感じるのだつた。それは彼の長篇の材料がお君との邂逅に暗示をうけて生じたのと、事情を全然異にしながら、しかも、より彼女の過去の生活を彷彿たるものがあるのだつた。

彼は氣になつてならなかつた。彼は畫面よりもお君の白い横顔に氣を止られはじめた。彼女は見ることを厭つてゐはしまいか？　いゝえ、しかし、彼女は熱心にながめてゐた。そして、時々、彼女は細い美しい指で目元をおさへるやうにした。押へることの出來ない實感が、彼女の目に涙をうかべさせてゐるに相違なかつた。

あまりにみじめなシインが續いた後で、あるほの明るい光りがそこへ翳した。微光は一人の

うら若い生々とした青年がもたらした。

青年はある場末の下宿屋にくすぶつてゐる畫工だつた。畫工は一目、暗い酒場の片隅で娘をみつけて、そしてたゞちに戀をするのである。その戀が、すぐに驚くべき速度で發展して行くのである。

お君は吐息をした。そしてうなだれるやうに見えた。

――刻戟が强過ぎるのかも知れない？

清は考へた。と、同時に、彼自身、不思議な動悸が胸の底で鳴りひゞくのを感じた。お君は自分の好意を、この畫面の娘が、青年の熱情をうけるやうに受け入れるであらうか？　もし、さうであり得たら！。

彼は何だか默つてゐられなくなつた。で、いくらか口籠りながらさゝやいた。

『少し空氣が鬱陶しいやうですね？　息苦しければ出ませうか？』

『いゝえあなたがかまはなければ私見てゐたいわ。』

と、かすかに彼女は答へた。

『君がよければ、僕はいつまでも見てゐますよ。』

清はお君と一緒にこの映畫を眺めてゐることが、だん〳〵苦しくなればなる程、一種言ふべ

からざる感情が心の底に横溢して來るのを覺えた。

――さうだ！　ことによつたら、この娘は、自分の氣持を十分に知つてくれてゐるのかも知れない。僕の心を知つて、この映畫を二人で見ることをよろこんでゐてくれるのかも知れない。

彼は出來るだけお君に注意しないふりをして、じつと坐りつゞけてゐた。

映畫はどし〳〵進行しつゝあつた。

5

――動き進む畫面が、だんだんそれを注視してゐる二人の若い男女の胸を、近づけ合はせ、結びつけ合はせるやうに思はれた。人はこゝに坐つて映畫を見てゐるのが自分達であるか、畫面の上にあらはれてゐるのがそれであるか、ハツキリと認識することが出來なくなつた程昂奮に捲き込まれた。

そして、スクリンの上の二人が哀しげに抱き合へば吐息をし、幸福さうに、戀の歡こびに燃えてキツスをかはすと、恥とうれしさとに、この二人もまた顏を紅らめるのだつた。

たうとう、ケテー孃の映畫はをはつた。バツト電氣が輝いた時、急には二人は顏を見合せなかつた。

しかし、清は、思ひ切つてお君を見た。そして出來る限り快活にいつた。

『面白かつた？』

『えゝ。』

お君はチラリとこちらを見て、あかくなつて目をそらしながら答へた。

――このひとは、今度こそ僕の氣持を知つてしまつた。

これまで一種の不安にしひたげられてゐた清は心に叫んだ。そしてよろこびに胸が躍るのだつた。

『もう出ますか？』

『え？　いゝえ？』

お君は不たしかに答へて微笑した。

『どちらでも――でも、私――』

かの女は二人で一分でも多く坐りつゞけてゐたいに相違なかつた清も樂く笑を返した。

『おしまいの喜劇も面白さうですね。じやあ、最後まで見て行きませう。』

キートンの卓越した演技は、二人の心をたゞ明るく、生き〳〵とさせてくれた。二人は隨分笑つた。つゝましい――これまで擊を出して笑つたことのないやうなお君さへ、隣に坐つた清

の耳に十分に聞きとれる程の聲で笑つてゐた。

――この人は吃度幸福になるだらう……そして、僕にも、この人を幸福にする力だけはあるのかも知れない――

清は心の中でいつて見た。

――その喜劇も終ると、二人も人ごみに揉まれながら、活動館の外へ出なければならなかつた。

匂ふばかりな初夏の夜――

――風がいくらか埃を立てるほどに吹いてゐたが、それが上氣した二人の頰にはかへつて心地よかつた。清は紙卷を吸つたが、こんなにうまい莫は吸つたことがなかつた。

『じやあ、お送りしませう――こんな晩はいつまでもあるいてゐたいけれど、本田君が心配するといけない――』

二人が町角まできた時、清はいつた。

『えゝ。』

お君は素直だつた。

清は辻タキシイを呼び止めた。

タキシイに坐つて、お君はハンケチを取り出して指に卷いた。ほのかな、美しい匂ひが流れた。

『いゝ香りだ。』

と、清がいつた。

お君ははづかしげに、しかし笑こぼれて答へるのだつた。

『いたゞいた香水ですのよ――』

彼の女は彼を思ひ出すたびに、この香りを嗅ぐのだとまでは說明しなかつたが、清はそこまで聞かずとも、よろこびで一ぱいになることは出來たのだつた。

――タキシイは、すが〳〵しい夜の風か吹きわたる巷を、激しい勢ひで走り續けた。

清はそんなに急がずともいゝと思つた。どうせ行きつくところへ行きつくのだ――行きついた以上二人は他人行儀に取りすましてゐるほかはない、――本田は敏感な男だから、一目見て一切を了解してしまうかも知れない。出來るがけ何事もなかつた顏をしてゐる必要があるのだ。

その氣持は、お君にも同じやうにあるらしかつた。彼女は疾驅し過ぎる町の灯をみつめながら呟いた。

『まるで飛ぶやうですわ。私、目がまわりさうですのよ。』

運轉手はそれを小耳にはさんだと見えて速度をゆるめた。

清とお君とは稍々間隔を置いて坐つてゐたが、車がぐん〳〵走つて、カーヴをまがる場合も少しも遠慮しなかつた中に、いつか動搖か二人を近づけてしまつた、二人があまりに近すぎることを、お互に氣がついてゐる――けれども、その距離を引き放さうとはしなかつた――出來なかつた。で、もう顏を見合せることも恥しくなつてめい〳〵に車窓の外を眺めてゐた。

市街はいたるところ、家々は建てかへられ、道路は擴張するために掘りかへされてゐた。

――都會のすがたが、恐ろしい勢ひで變化しつゝある。

と、清は心の中で言つて見た。

――だがそのうちに、生れ變つたやうに美しくなるだらう――僕たちの心のやうに……生活のやうに――。

彼はどんなものを見ても、うれしく歡ばしかつた。お君を知つてから、何も彼もが、彼の心の底で變りつゝあつた。これまで一度も知つたことのない新世が――甦生が――新らしい力がはじまりつゝあつた。

――何といふやさしい、何といふしづかな娘だらう！

彼は自分の戀が、少しの荒々しさもなく育つて行くのがたのしかつた。彼は大人しい性格だつたので、若し狂熱的なものが襲つて來たなら途方に暮れたかも知れない。

『涼しい風ですこと！』

と、お君がつぶやいた。

しかし二人は、もうぢき本田の寓へ近づかうとしてゐた。

清は本田に對して何となくうしろめたかつたが、逢はないわけにも行くまいと思はれた。門口までゝ辭し去つたら、却て妙に取られるかも知れない。

二人は自動車を止めた。

小さな二階家を見上げると、上には明りがカン〳〵と點いてゐた。

『あゝ本田は勉强してゐる。』

と、清はつぶやいた。

『この頃二時頃まで毎晩机に向つてゐますのよ』

と、お君が答へた。

お君を先きに、二人が二階へ上つた時、本田は一生懸命原稿紙へペンを運んでゐた。

『只今』

お君のこゑで、ペンをつかんだまゝ振り返つた。彼は清を見出すと安心したやうに微笑した。

『あゝ君が一緒だつたのか――安心した。僕は君ちやんが一人でどこかあるき廻つてゐるのだと思つて、ずゐぶん心配したよ』

6

――本田にさういはれると清は弱點を衝かれたやうに、氣持の底でタジ〳〵とするのだつた彼はきまり惡さうに笑つた。

『なァに、今日、お君ちやんの社の側まで偶然行つたものだから、どうしてゐるか氣になつて電話をかけたのだよ。すると、もうすぐ退けどきだといふので外に待つてゐて散歩しながらいろ〳〵話を聽いたのさ。そのあげく、活動寫眞へはいつてしまつてネ――君にやあすまないと思つたが――』

『僕にすまん？　何がさ』

と、本田はやつとペンを措いてやりかけの仕事から清の方へ向き直つて笑つた。

『ちつともすまなかあ無いよ。心配はしてゐたものゝ、ひとりでゐたおかげで、仕事は大分はかどつたよ。今日は朝ツから机に向ひどほしで、三十枚ばかりかいたよ。どうだ、えらいだ

らう。』

本多は磊落にひと重ねの原稿を指さして見せた。

お君は二人の話を聴きながら、樂しげに茶を入れたり、菓子の皿をだしたりするのだつた。

三人は今は何の屈托もないやうに見えた清も心はすべて解けた。本田とお君との間には何等の秘密もなく、しかも自分の氣持を本田自身知り切つてゐるやうに見えるのである。

『お君ちやんも、これでひと安心といふものだ』

と、本田は仕事のあとの茶を、さもうまさうに飲みながら言つた。

『ひとつうまく行きはじめると、何でもどし〳〵運んで來るものだもう壁の方へひツついてはしくしくやる必要もなくならう。』

『え、、もう悲しいことなんか、何もかも忘れてしまつてよ。』

と、お君も元氣に言つた。

『さうだ、忘れてしまふのが一番だよ。新しい日がはじまつたら、古いことは問題ぢやあないんだ。若いものは明日のことしか考へる必要はないんだ』

――明日――

それは複雜な問題だ。明日に、なるほどすべてが待つてゐる。あらゆる幸福もまた不幸も待つてゐる。今日と變らない明日もあるが。しかしまた驚くべき明日もあるには相違なかつた。

それは專制王をさへ斷頭臺に上せ、乞食をすら帝王の夢を見させるかも知れないのだ。

――だが、すべての若ものは、たゞ幸福を信じる。自分に豫約された光榮の日を信じる、今日より明日は必ずよいものでなければならない、この盲目的な信念が、彼等をして、學ばせ、働かせるのだ。

それゆゑ、この狹苦るしい、小さな室に坐つてゐる三人が、どんなに未來を樂しみに思つても責むべきではなかつた。たゞ、意地惡な惡魔が、どこかの隅から、かうした樂天的な人間同志の會話を聽いてゐたなら、苦々しい微笑で唇をゆがめたかも知れなかつた。

いづれにもせよ、三人は樂しげだつた。お君は生活の方針が立つたことによつて喜ばされ、同時におぼろげながらも、清を戀しそめてあることに自分で氣がついてゐた。そして、清が決して自分を嫌つてはゐないことを知つて、あらゆる美しい夢で一ぱいだつた。本田は本田で、お君と清とに何等かの關係が生じても、それは無理なことでなく、きはめて自然な話だと思つてゐた――寧ろ、この二人の關係がどう發展してゆくかを興味の目でながめるのであつた。

受難

1

——東京出版社神田支店は、今や大活動期に入らうとしてゐた。支店長は、本社の用心深い方針を打破して、すこぶる積極的に押し通して行くことを決心した。彼はある豫約出版を計畫して、一舉に雌雄を決さうとしてゐたので、連夜、事業上の相談で待合で夜をふかしてゐるのだつた。そこには勿論、酒や色が付きものだつたが、彼自身は適度に飲む以外、女たちにはあまり興味を持たなかつた。たゞ夫人が病身だつたのである必要上から、かうした種類の婦人たちを絶對に排斥することも出來なかつただけであつた。で、名古屋時代には愛妓があつたが、最近首都へ出て來てからは、まだこれといふ目ぼしい妓も見つけ出すことが出來ずに、一種の不滿を感じてゐた。昨夜も昨夜、ちよいとした女を見出したのだつたが、相手はおいそれと彼の要求をみたせる境遇にゐなかつた。つまり旦那もちで、いかに水商賣の身でも。おいそれとからだの切りうりも出來ないといふわけだつた。

支店長は、商略上のつきあひで一夜を待合のはなれで明したが彼自身としては極めてつまらないひと晩だつた。彼はものうい氣持で、待合から社へ出て來た。二日醉が頭に殘つてゐていつものやうにテキパキと仕事がはかどらなかつた。それでも十數人の來客を片つぱしから用談をすまして歸して午餐を取つたあとでは、日ごろの氣力がいくらか復活して來た氣がするのだつた。

彼は僅の自分の時間を、デスクに頰杖をついてゐた。彼はいかつげな目つきで、オフイスの中の社員たちをジロリジロリと眺めてゐるのだつたが、ふと、その瞳が、部屋の一隅にそゝがれた時そのまま動かなくなつた。

——オヤ、あれは！

と、その時彼の心は叫んだのだつた。

——あれは全く愛子に似てゐる——和裝と洋裝——年增と娘との差異こそあるが——

彼はお君のうしろすがたをじつとみつめてゐるのだつた。彼は身邊のいそがしさに、社內の女たちの顏かたちを十分に吟味するひまもなかつたのだつた。今はじめて新參の女事務員をハツキリと注目した。そして驚きに打たれたのである。彼は名古屋で寵愛してゐた藝者に、全く瓜二つなすがたをそこに見出したのだつた。

――さうだ、全く人間といふものは近いところには目が屆かない――燈臺下くらしとはよく言つたものだ。

と、彼は呟やきつゞけた。

――われ〳〵は遠いところにばかり目をつけやうとしてゐる。愚なはなしだ。

支店長は悧巧さうな唇にかすかに微笑をうかべた。そしてその次の瞬間には側の給仕を呼んだ。

『オイ、書記課の本田君に、ちよいと來てくれるやうに言ひ給へ。』

詰襟の給仕は去つた。

お君は給仕の言葉を聽くと、何がなしにびつくりしたやうな表情で立ち上つた。しかし、彼女は指先についたインキを紙で落して、支店長のテーブルの方へ來た。

彼女は頰を紅めて、腰をかゞめた。

支店長は出來るだけやさしく微笑した。

『どうですね?、いそがしすぎますか?』

『いゝえ。』

お君はおど〳〵答へた。

『仕事が單調で、さぞ退屈だらうと思ひますが――』

『いゝえ。』

お君はふたゝび同じことを、同じ態度で答へた。

支店長はニヤ〳〵と微笑をうかべながら、

『氣に入つて働いてくれゝば、僕の方も非常にうれしいのです。事務は馴れゝば馴れるほど捗どる。始終人が變るのは、會社の方でも不得策ですから――しかし、たつたひとつ僕として心配なことがあるのだが――』

彼は一さうニヤ〳〵と目元を弛めるやうにして、

『それは君があんまり美しいといふことですよ。若い御婦人は、美であるほど幸福だが、しかしそれだけ當然誘惑が多いわけで――勿論、この會社には不謹愼な社員はゐないはずですがそこを十分注意してくれるやうに願ひたいのです、第一、もし君に何か問題が起ると――どなたと云ひましたかなア、多分君を保護してゐる例の藤島さんのお弟子さんにもすまないから――』

お君は眞赤になつた。

その紅い顔を、何ごとかを見拔かうとするやうな目で、支店長はじつとみつめて、

『あの人と君とは許婚でもあるのですか？』

と、無遠慮にたづねる。

お君はうつむいて、兩手で顏をかくすやうにして、思はず答へてしまつた。

『いゝえ。』

『ほう――じやあ、たゞのお友だちなのですね？　なあにネ、立ち入つたことを訊くやうだが社の人たちの身邊については、出來るだけくはしく知つて置く必要があるので――いや、それで安心しましたよ。君のやうな美人が、專有されてゐないといふことを聽くのは僕にだつて決して不快ではないからネ。ハ、ハ、ハ』

彼はわざとらしく、あたりの人達へ聽えるのもはゞからず言つて笑つて、

『では働いて下さい。』

お君はやつと苦境をのがれたやうな氣持で、支店長のデスクを去つた。

――彼女はふたゝびペンを取つて仕事をつゞけやうとしたが、しかし、心は重く惱ましかつた。彼女は支店長から清に就いて訊かれた時、あんまりハツキリ何等の交渉もないことを言つてしまつたのが氣がとがめてならないのだつた。彼女と清とは、まだ口に出しては愛をさゝや

きかはしたことはないが、お互に目と目で――口よりも雄辯な目と目で、すべてを語り合ひ、了解し合つてゐるのだ、それなのに、あのあまりに明瞭な自分の返事は――

お君は清に對して、大さうすまなく思はないわけにはいかなかつた。もし清が側にゐてあの返事を耳にしたら、どんなに不快に思ふだらう――だが、あの外に答へのしようがあつたらうか？

お君は一分一秒でも、清から心を引き放すことは出來なくなつてゐた。彼女の生活が改まらうとしたその日から交際がはじまつて、而も、その人のおかげで確乎とした職業がつかめたといふことが、感情以外に運命的に、とうに二人をはなれがたいものにしてゐるやうに信じることを止められなかつた。

――でも、あの方はゆるして下さるわ。私、たゞ、氣まりがわるかつたからあゝ答へたまでよ、今度お目にかゝつたら、かくさずに何も彼も言つて許していたゞきませう。

彼女は强て微笑して見た。そして懸命に仕事をつゞけることが出來たのだつた。

五時――例によつての退けどき――彼女は手洗場へ行つた。すると、そこには浦路なみ子が來合せてゐた。

2

——お君は、なみ子に呼びかけられて振り返つた。なみ子は顔を直してゐた手を止めて、ぐつとお君の方へ近づいて來た。

『本田さん御用心なさいよ。』

『え？』

お君はびつくりして顔を見た。なみ子はニタ——と、少し弛みすぎてゐる紅い口を一さう弛めた。

『え？ッて、あんたもなか〳〵空ッとぼけがうまいのねえ。』

お君はわからなかつた。なみ子の言葉が何を意味してゐるのか理解することが出來なかつた

お君がうつとりとして自分をみつめつゞける顔を、ほんたうに呆れたやうになみ子は見返した。

『まあ、何も氣がつかなかつたの？　もつとも、誰も他の人は注意してはゐないらしかつたわ

でも、あんたは御當人だからいくらか知つてゐるだらうと思つてゐたのよ。』

『まあ！　何でせう？』

と、お君はます〳〵目をみはつた。

『ほんたうにわからない方ねえ。』

と、なみ子が笑つた——無遠慮に、大きなこゑで笑つた——周圍の人たちがふりかへるほどに——

『あんたはそんなに子供だつたの？　私、もう少しどうにかなつてゐる人かと思つてよ。』

お君はわけ知らずに紅くなつた。

その顔を、なみ子は興味ありげに眺めつゞけた。

『今日、あんたを支店長がわざわざ呼びつけたでせう——あの時あの人の目つきと言つたら、それは全く見ものだつたわ。』

——どうしてゞせう？

と、いふやうな表情をお君はうかべた。何かゆゑありげな言葉なので、彼女は無關心でゐることが出來なかつた。

『あの人は、變に笑ひながら、今にもあんたの手位握りさうだつたわ。私をかしくつてかなはなかつたことよ。あの人——』

と、なみ子はいよ〳〵お君の耳のはたに口をつけて囁くのだつた。

『あの人、あんたに、氣があるのよ。』

お君は、突然、青ざめた。

しかし、彼女にはそれを信じることが出來ない。

いかに何でも、一個の著名な出版社の支配人が、うら若い女事務員を相手に、そのやうなことがあり得るだらうか？　出版社は、彼女がこないだまでつとめてゐた場末のカフエーとは違ふはずだ。

けれども、なみ子は固執した。

『用心しなけりや、駄目よ、あんた、それとも若しあんたが――』

なみ子は、その時誰かに呼びかけられた。お君が名乘り合つたことのない女タイピストだつた。

『あ、さう――行くわよ』

で、なみ子はお君を無限の不安の淵へ投げ込んだまゝ去つてしまつた。

お君は、重い〳〵惱みにおされてビルデイングを出た。

すると、そこを二間とはなれぬうちに、運轉手風の男が、鳥打のつばに手をかけて進みよつた。

『あなたは本田さんでいらつしやいませう？』

――運轉手らしい男は、慇懃に小腰を屈めながら言ひかけるのだつた。

『あなた、本田さんでいらつしやいませう？』

お君はおどろいて眺めた。

『はあ、私・本田きみ子でございますが――』

『あちらの自動車で、支店長がお待ちになつていらつしやいます、――どうぞ。』

お君はハッとした。さきほどなみ子が言つてゐた言葉が思ひ出された。彼女はすぐには何とも答へることが出來なかつた。

『どうぞ――こちらへ。』

お君は、しかし、このまゝ振り切つて歸ることが出來ない――ほかの人ではなかつた。相手は支店長だつた、その人がこゝろよく自分を迎へて呉れたればこそ、生活の道も立つてゐるのであつた。

彼女はとにかく彼に逢つて用向を聽かうと思つた、その上でともかくものことだ。

お君は、心は進まぬながら、運轉手の導くまゝに踉いて行つた。自動車は不思議な位置に止めてあつた、ビルデイングの横手の横町で、ちよいと人目にふれがたいところに置かれてゐた。

彼女は黑く光る大型自動車の側まで行つた。窓から支店長が、いかにも親しげな微笑をうか

べた顏を突き出してゐた。
お君は會釋をした。
『何か御用でございませうか？』
『ええ、すこしばかりお話があるのです。ちよいとこみ入つたお話が――』
そして、その時には、運轉手が車のドアをあけてゐた。
『どうぞ、お乘り下さい。二人だけで落付いたところでお話がしたいのですから』
お君は辭まうとした。
『すみませんけど、今日はこれからちよいと――』
『いゝえ、それは知つてゐます。君にも御自分の御用のあることは――しかし、僕はどうしても君の耳に入れて置かねばならぬことを持つてゐるのですよ。』
支店長は相變らず微笑んではゐたが、どこか押しつけるやうな目付をしてゐるのだつた。
『さあ、どうぞお乘り下さい。』
お君はよんどころなくなつてしまつた。彼女はまだうら若い小娘であつたから、男性のいかなる壓迫をもはねのけることが出來なかつた。
彼女はおづ〳〵と自動車の踏段に足をかけて、いつしか中にはいつてしまつた。

『さあ、掛け給へ。』
支店長は、ちよいと身をひらくやうにして迎へた。
お君はつゝましく、小さく、片隅に坐つた。
『さあ、これから、君とお夕飯を一緒に食べながら、いろ〳〵仕事の上の話やら、僕としてのお賴みやらを聽いて貰ふのです。』
支店長は快活だつた。そしてさもうまさうに葉卷の煙を吐いたがお君が咳き入るのを見ると、あはてゝ吸ひさしを窓から投げた。
お君は彼のさうした心使ひに對して、何となくすまなさを覺えた支店長が、自分をさも對等の境遇のものでもあるやうにあしらつてくれるのがうれしい氣がした。
――この方はなみ子さんがあてこすつたやうな方かしら？　いゝえさうではないかも知れないわ。

3

お君は、いかに艱難な生活を通過して來たとはいつても、まだはたちにも足りぬ一少女だつた、物ごとに感じ易く、すぐに悲しみに陷つたり、希望に燃えたりするのだつた。そしてそれ

は、彼女程の年ごろの娘にはふさはしいことには相違なかつた。

支店長は窓から見えるビルディングや建築を指さして、いかにも柔しい口調で説明したりした。

それをきいてゐるうちに、お君のこころはだん〳〵に解けてくるばかりだつた。

『君は履歴書で見ると、女學校も中途でよしてゐるやうだが、それにしては、隨分手なぞもいいではないか――だからかしこい人たちは女にしろ男にしろ、幸福になつて行くことに望みを捨る必要はすこしもないのです。』

――お君はたゞうなづいてゐた。彼の女はさういはれゝば、そのやうな希望を感じるのだつた。ほんたうに、あんまり長い暗い生活だ、もうぢき明るい日がくるかも知れない。その機會ははつきりとつかまねばならぬ。

かの女は支店長がどんなつもりで今の言葉をいつたかを考へるひまもなく、すぐに自分のことに持つてくるのだつた。かの女の胸の底にはいつもの幻影がハツキリとうかび上がつて來た――清の幸福さうな顏が――喜びに充ちた笑がほが――

自動車はいつか下町を通り拔けて、高臺へ上りはじめてゐた。青葉の多い町はもうたそがれはじめてゐた。

かの女はどこへ連れて行かれるかもわからなかつた。いつか支店長に對する警戒は解けてしまつてゐた。

自動車は大きな屋敷町にはひつた。そしてたうとう鐵門の前に止まつた。

運轉手はうや〳〵しげにドアをあけた。

青い制服を着た小年が二人すぐに出迎へた。

支店長は少年たちに何かささやいた。二人はうなづいた。

『さあ、おはいり下さいこのホテルは、僕がまだ名古屋にゐたころ上京のたびに泊つた家ですしづかな、たのしい家ですよ。』

支配人がデブ〳〵なからだをヨチ〳〵と歩いて來て膝を屈めた。

『御榮轉で結構でございます。御榮轉でまことにはや――』

『ありがたう〳〵。まあ榮轉といふわけでもないがね……』

と、支店長は、そんなことをいひ捨てたまゝ、奥の方へはひつて行つた。

お君はあとをついてゆく、かの女はいくらか不安を覺えた。しかし、その不安は、別にこみ入つたものではなかつた。ただ、住馴れない廣い大きな家にはじめて足をふみ入れた娘の心に湧くかるい恐怖にすぎなかつた。

支店長がかの女を導き入れたのは、本館から翼家に張り出された別館だつた。

『さあ、入りたまへ。僕はこの室が大すきなので、こゝへくるとこの室をえらむのですよ。』

部屋の中には、ごくあつさりと調度がならべられてゐる。ゐ心地のいゝ大ソファが白い蔽ひをかけられて窓際に置かれてゐた。

支店長は、自分がそれに腰をおろすと、お君をさしまねいた。

お君はおづ〳〵と近づいた。

――お君は不安を押し靜めながら椅子にかけてゐた。

青い制服を着た少年が、銀盆にグラスや罎をのせて持つて來て、一つの盃に黄金いろの酒を、ほかのへは綠いろのを充して退ぞいた。

支店長は自分は黄金いろの酒をしづくもあまさず直ぐにのみ干し綠いろのをお君の方へ押しすゝめた。

『甘いのですよ。醉ひはしません。』

お君はうなづいただけで、それに手を觸れはしなかつた。

彼女はどんな話を聽くために連れて來られたのか、早く知りたかつた。

しかし、支店長は葉卷を吸ふにいそがしかつた。葉卷を吸ひながら、いつまでもお君を眺めつゞけてゐた。お君はその視線を感じてゐたので、目をあげることが出來なかつた。

支店長は、やがてそれとなく話しはじめた。彼の物語はすこしも用談らしいものではなく、神田支店の創立に關する自分の苦心や、その苦心がいかに迅速にむくいられつゝあるかといふことだつた――――いはゞ、一種の自慢ばなしにすぎないのだつたが、表現形式が無邪氣らしくひゞくので、別に聽き憎くもなかつた。

お君は默つて聽いてゐた。彼女はいかにも働きものらしい支店長と、かうして二人だけでゐるといふことに、言はゞ誇りさへも覺えもした。相手が何となくたのもしげに思はれて來た。

――しかし、さういふことを、私とに何の關係があるのだらう？

彼女はとき〳〵自分にたづねて見た。

けれども相手は饒舌を止めなかつた。彼は會社のはなしから、だん〳〵自分の身の上ばなしの方へはいつて來た。

彼はひどく多病な妻女を持つてゐて、そのひとをいつも須磨の別莊へ送つてゐるのだつた。一年の中に相逢ふ機會はひどく稀れでほとんど獨身と言つてもよかつた。今度も東京で家は持つたが、そこを守つてくれるものは長年仕へてゐる老婆だけであつた。書生も女中もたよりに

はならない。で、彼はまるで家庭的幸福を知らないのである——。

そして、突然、彼はお君をまつすぐに見た。

『君は、さきほどの話では、從弟さんの家に厄介になつてゐるだけで、ほかに何の係累もないといふお話だつたが——』

お君は直接に自分に觸れるはなしになつて來たので緊張した。

『それでお頼みがあるのだが、御都合で、僕のうちの方の役目を君に引きうけて貰はれまいかと思ふのだが——』

お君はハッとした。これはあんまり突然な、あんまりケタのはづれすぎた申しいでであつた。

『どうだらう?』

と、支店長はみつめつゞけた。

『君が承知してさへくれゝば、明日からでいゝのだ——會社で働いてくれるのも僕の後方勤務をつとめてくれるのも、結局同じわけなのだから——』

お君は答へられなかつた。すると、支店長はニタリと笑つて

『それとも、やつばし例の吳芝君と何か特殊な——』

お君はだし抜けに清の名を持ち出されて、兩手で顏を蔽はうとする外はなかつた。

4

——お君は支店長の言葉に、何等複雜な意味を帶びさせまいと力めて見た。かの女はまだ浮世の汚穢にさうひどく染つてゐはしなかつたから、他人の好意にまで、一々不潔な內容を添はして考へるやうなことは出來ないのだつた。

けれども、いづれにもせよ、かの女には彼の申しいでをすぐに受け容れるわけにはいかない——かの女は清を離れて何事も計畫することは到底出來ないのだ。それはかの女が彼を愛してゐる限り當然だつた。

『それとも、君が僕の私生活に交渉を持つとしたら、誰れからかきびしい抗議でも出るといふのですか。』

支店長は、黃金いろの酒盃を重ねながら、ニタニタと微笑するのだつた。

『君のやうに美しい娘が、戀人を持たないといふことの方が不自然なのだから——』

お君はうつむきつゞけてゐた。かの女はハッキリとそれをいふ必要があるのだ。しかし、一度きつぱりと清との間の純潔を誓つてしまつてゐる以上は、一少女の氣弱さから實はかう〳〵

だと今更明けかねるものがあつた。

『たとへ君に特別な關係のある人があるにもせよ、僕の話は別にその人を憤慨させるやうなこともあるまいと思ふのだがなあ。』

相手はすこしも氣にかけるやうな容子もなく、なでるやうな微笑をうかべつづけた。

『僕は勿論君にあらゆる自由をあたへるよ――君は僕のために出來るだけつくしてくれたあとは、勝手な時間を持つわけです、僕は御存知の通り自由放任主義だから――ね。今日、ちやんと約束してもらひたいものだ。大てい僕の氣持もわかつてゐてくれるだらうし――』

お君は理由の如何にかかはらず拒絶しなければならぬ。

『ですけれど、私、とてもさういふお役目がつとまりさうもありませんから――』

とだけいつた。

『いゝえ、君には十分つとまりますよ。君はどんな無經驗なことでも、して見れば出來るんです。會社の仕事を見たまへ。これまで何の經驗もなかつた　だが、立派に男まさりにやつてのけてゐるではありませんか――』

『でも、實際上のことなんか、私には全然不向でございます――』

支店長はいつかお君の白い指をまさぐるやうにしはじめてゐた。

『どんな失敗があつても、僕はとがめはしません――馴れるまでは誰だつてやりそくなひはあるものです。』

彼の言葉があまりに柔しいのでお君には、取られた指を振りはらふことも出來なかつた――しかし出來るだけしづかに――やつとのことでその指を自由にしたのだつた。

『實をいふと。』

と、突然、彼は相變らず笑つてはゐたが、ズバリといつた。

『實をいふと、僕は大變君が好きなんですよ。』

お君は目を睜いた。驚いてかの女は支店長をながめた。

『そんなにびつくりしなくともいいじやありませんか。』

相手は面白さうに葉卷の煙をふくのである――

『あたりまへな話だ。君がそんなに若くつて、そんなに美しい以上は――』

お君は兩手で顏を蔽てしまつた。

支店長の行爲はだん〳〵露骨になつた。彼はソファに寢そべつたまゝ、怪しい微笑の目でお君を追ひ求めるのであつた。その視線は妙にねばツこく、からみつくやうな力で迫つて來た。

お君は兩手で顏をかくしたまま身じろぎもしなかつた。

『何もそんなに考へ込む必要はないじやないか？』

と、からかふやうな調子で彼は言つた。

『お互にここまで信頼し合つて、今更引込思案になるのは困る――ねえ、君しつかりしたまへ。』

彼の手はお君の肩先にかゝつたお君はいつの間にかそれに抗ふ力もなくなつて、くた〳〵と引き寄せられるのだつた。

支店長は大さう滿足げに見えた彼は抱きしめるやうにさへするのだつた。

『僕はたつた二人で君とかうしてゐられると思ふと、ほかの世の中はすつかり忘れてしまうのだよ。僕はもう事業も何もいらなくなる氣がするのだ。』

彼はお君の白い手をまさぐつた。そして近々とその手の平を目に押しあてるやうにして、

『おゝ君の手相はすばらしい。僕の友人に篠原といふ男がゐてこれがアメリカ歸りの手相見なんだ、で僕も多少をそはつてゐるのだがね、これは君、君が運命に從順でありさへすれば幸福になるにきまつてゐる相なのだ。君たち美しいむすめは、惡い運命は決して襲つて來ないと信じていゝのだ。』

お君は手をあづけたまゝで忍んでゐた。しかし、たうとう彼女は手の甲に疎い髭の感觸を感

じた。

彼女は飛び上つた。疎い淺間しい感覺が彼女を震駭させた。

處女を護る力はこの世でかなり大きなものゝひとつであらう――お君にはその力はのこつてゐた。彼女は逃げ出した。彼女はドアの方へ走しらうとした。

『きみ子さん、どこへ行かうとするのだ。馬鹿な子だなあ――』

支店長は狽てなかつた。彼は葉卷をくはへたまゝで立ち上つた。

お君はもうドアのハンドルに手をかけかけてゐた。

支店長は抱きすくめた。

『はなして下さい、歸らして下さいまし！』

と、お君ははじめて叫んだ、そして身もがきをした。

『いゝえ、離さない。』

と、支店長は笑みをうかべてゐた。

『逃げようとしたつて駄目だよ。』

しかし、彼女はなほ叫びつゞける、みにくい汗がからだ中を流れて來た。

『いやだ！　私はいやだ！』彼女はこのまゝで舌を嚙み切りたかつた。

涙も汗も、自分から流れ出るものまでがきたなかつた。

彼女は全身の力をこめてすり拔けやうとした。

支店長は葉卷を捨てた。彼は吸からを悠々と靴で踏みにじつて、そして彼女の耳に唇を押しつけるやうにした。

『ぢたばたさわいだつて駄目ですよ。ソウ、こんなに汗が出てゐるじやあないか。』

お君は顏を振りまはした。

兩手をふりまはした。

――そしてこのみにくい光景がいつ止まるのかわからなかつた。

5

しかし、いかなる危機にも、それを脫する機會はあるものだ。彼女がもうすこしでソファに引きもどされやうとした時、ドアの外でノックが聽えた。

支店長は耳にはいつたかはいらぬか氣にも止めずにゐたが、お君にはこよないきつかけだつた――一少女の智惠で、彼女は彼の抱擁の中で、きはめて自然な返事をした。

するとドアが開いた。

いかなる支店長も、この突然の闖入には、刺戟をうけたと見えて、お君を自由にするだけの隙が出來た――お君は摺り拔けた。そしてその次の瞬間には、彼女の惡魔の部屋からやつとのことで廊下へ出たのだつた。

支店長は、さすがにあとは追はなかつた。彼の唇へは、無限の苦笑が上つた。

『馬鹿めが！』

と、彼はつぶやいた。

『物のねうちを知らない馬鹿娘にとんだ無駄骨を折らされたものだ。しかし、さうせつかちに考へるのも――』

飲料をもたらして來た少年は、びつくりした目付で、闕際に佇んでゐた。

支店長はジロリと見て、嘲けるやうに笑つた。

『馬鹿だよ、君はよつぽど馬鹿だよ。』

少年はます〳〵驚いてゐた。

『よし〳〵、まあそれをこゝへ持つて來い。』

支店長は時間つぶしをした腹癒せを醉で遣らうとするのか、大きなグラスへ滿々と茶つぽい液體をついで煽りつけた。

少年はおづ〳〵と去つた。

――さうした時、お君はやうやくのことでホテルの外にゐた。どこか雷雨模様だつたのか、たうとう大粒な雨を落して來て、蒼ざめた稻光りが夕闇の中にひらめいてゐた。お君はさうした空模様にまるで氣がつかないやうに見える。彼女は走しつた、走しつた。他人が見たなら着物が濡れるのを怖れて驅けてゐるやうにも思はれたらう――しかし、彼女はついうしろを、恐怖すべき惡魔が追ひ逼つて來るやうな氣がしてならないのだつた。

十字路のところで、客にあぶれつゞけらしい辻タキシイが彼女を見かけると、車を止めてドアを開けるのに逢つた。すると何等の躊躇もなく彼女は飛び乘つてしまつた。

はじめて一種の安心が彼女へ來た。これで今夜のところを、いづれにせよ、危機を脱したのだ。まあ、よかつた！　しかし、明日からをいかにすべきであらう！

彼女はやつとのことで清の力で得た生活の道を、たつた二十五圓の月給にしろ毎月手にすることの出來る位置を、この一夜の出來事に依つて絶ち切り、思ひ切らねばならぬといふことが出來るかどうかわからないのであつた。人間が――ことさらかよわい娘が自身で生きてゆく上には、この位な苦難は當然覺悟すべきではあるまいか――彼女はそれに思ひつくと、タキシイの中で兩手で顏をかくして身ぶるひした。

――でも、死んだつて、私には忍べない！　忍べない！　こんなのが生活なら、私はいつでも捨てゝしまうわ！　死んでしまうわ！

ガタ〳〵自動車は、雷雨の中を走りつゞけて、いつか彼女の寓の前まで來てゐた。

――お君はトボ〳〵とわが寓の階段を上つて行つた。俄雨にじつとりと着物が濕れて、二の腕のあたりに袖がまつはりつく。彼女はかなしげに入口の襖をあけた。

本田は今日も相も變らず仕事に熱中してゐたが、

『おそかつたなア、あんまりお腹がすいてしまつたから、ライスカレーを取つて喰べたよ。』

そんなことを云つて、じつとお君をみつめる。

お君ははか〳〵しく返事もせず小鏡の置いてある棚の方を向いて顏をうつして見るでもなくほんやりと立つてゐた。

本田はいぶかしげな目つきをした。

『どうしたのだね？　君ちやん。』

お君はやさしくさう言はれると突然、これまで怺えてゐた涙が堰を切られたやうにボロ〳〵とこぼれて來るのを、どうすることも出來ないのだつた。

彼女は脱いだ帽子を顔に押しあてるやうにした。咽び泣きに細い肩が荒々しく搖れた。

本田は明らかに驚かされた。彼はペンを投げて、立ち上つて、お君のうしろへ來た。そして搖れてゐる肩へ手をかけた。

『どうしたの？　氣持でも悪いのかい？　それとも何か――』

彼はお君の顏をのぞき込まうとした。相手はさうさせまいとするやうに傍を向いた。

『どうしたの？　泣いてゐるぢやあないか。？　泣いてゐるだけではわからない。何かあつたのだね？お言ひ！』

お君は本田の腕にもたれかゝつてしまつた。本田はお君を机の側まで連れて來た。お君は本田の膝にとりすがるやうにしてシク〳〵泣きつゞけた。

『どうしたの？　君ちやん。』

『わたし、どうしていゝのかわからないのよ。從兄さん――』

と、後女は口ごもつた。

『どうしていゝかわからないつて――』

本田はちよいと考へて、そして急に微笑した。

『わかつた、君は喧嘩をしたのだね？　吃度清君と喧嘩をしたのだらう？』

『いゝえ、いゝえ。』

と、お君は彼の膝の上ではげしくかぶりを振つた。

『あの方と喧嘩なんか――あの方にはお目にかゝりもしませんわ。』

『ちやあ、どうしたのさ？』

本田の目から微笑のかゞやきが消え失せた。

『ハツキリお言ひ――君は僕の前でかくしてゐることはないよ。』

『支店長さんが――』

と、お君は荒つぽくせぐつた。

『私にいろんなことを――』

『で？』

本田は冷靜だつた。

『で、私おこつて飛び出して來ましたのよ。』

『それツ切り？』

『ええ、それだけのことですけど――』

本田は考へ込んで、そしてお君を抱き起すやうにした。

『君ちやん、君はあんまり氣が弱過ぎるよ――君はもつとハツキリした考へを持たなければいかん。』

6

――本田は彼女が語つた難義な經驗を、實際よりも手輕く觀察したのか、それともさうでなくともそんな問題を問題としない、あつぱれな働き者としての彼女に仕立てようとしたのか別に深く氣に止めないやうな口調でつゞけた。

『君のやうに若い綺麗なすゝめが男からかれこれ言はれるのは當り前なのだよ。世間の男たちなんといふものは、美人の側へ來ると、まるで御馳走の匂ひをかぎつけた蠅みたいなものなんだ。ブン〳〵いやらしく羽根を鳴らして、恥知らずにたかつて來るのさ。蠅なんぞは、うるさくなれば追ツ拂つてやればそれでいい。そんなものに一々こだわつてゐたんでは、とても世の中へ出て生活は出來ないぜ――しッかりし給へ。』

しかし、お君のなみだは止まらなかつた。彼女はいつまでもせぐくり泣いた。

『ねえ、もう泣き止んだり――そして、蠅帳の中にライスカレイが取つてあるから、それを食べて、お風呂に行つて來るがいゝ。』

入浴のことを言はれて、お君は全身をこはばらせた。彼女はこの五體が、たとへ二人の着物をへだてゝだとは言へ、支店長のあの卑野な抱擁の中にあつたのだと考へると、さき程の油汗が、もう一度ダラ〳〵と流れにじんで來るやうな氣がするのだつた。

――從兄さんは、何もわかつて下さらないのだ――女の心はわかつて下さらないのだ。

彼女はやるせなかつた。若し、清ならば、今夜の彼女の苦惱を一から十まで推量してくれるであらう――清ならば何でもわかつてくれる――それに違ひない――そして、どんなに憤つてくれるだらう――泣いてくれるだらう！。

本田は苦勞をしつくして來たやうな青年だつた。彼は、女は泣くだけ泣けば氣が靜まるものだと知つてゐた。

『とにかく氣をしづめて、何もしたくなければすぐに寢るがいゝよ。大變つかれてゐるやうだ――神經が昂ぶつてゐる時には、眠りが何より藥だから――』

彼は水をコップに一ぱい注いでお君に渡すと、もう彼女の方へはうしろをむけて机の仕事にとりかかるのだつた。

お君は、本田が考へた通り、いつまでもしく〳〵やつてゐたが、やがて片隅で浴衣に着更へると、二人の床を伸べて、

『おさきへ――』

と、小さく挨拶して横になつてしまつた。

彼女は實際今日といふ今日は綿のやうに疲れ果てゝゐた。神經はとがりにとがつてゐたが、緊張が度を越して、今は斷ち切れさうにさへなつてゐた。で、暗い、惱ましい想念を追ひつゞけてゐるうちにいつかウト〳〵とまどろんでしまつた。

本田はお君と同居してからこの小さな二階生活には弱つてゐたので、屈りなりにも借家をしようと思ひ立つてゐた。そしてその準備のために晝夜兼行で安飜譯の仕事をはげんでゐるのだつた。

今夜も彼は働き明かした。短夜はいつか明けたが、お君を送り出した後でゆつくり眠らうと彼女が起き出すのを持つために疲れた氣持で新聞や書物などをひろげてゐた。

しかし、お君は、今朝に限つてなか〳〵起き出さなかつた。眠つてゐるのか、それを裝つてゐるのか八時近くなつても起き出さなかつた。彼はたうとう二三度こゑをかけた。それも利き目がないので彼は枕許に行つて搖り起した。

『さあ！　起きた、もう八時だよ。』

――本田に二三度搖り起されてお君はやつとのことで起き直らうとするのであつた。

『どうしたの？』

と、本田はめつきりやつれさへ見せてゐるお君の顏を眺めて微笑した。彼は、彼女がどんなに息苦しい惡夢を見つゞけたかを想像することが出來る。お君が今朝、したしい自分にすら假病を使つて、出勤を怠らうとしたところで、それが罪であらうか？

『さあ、早く元氣を出して起き給へ。愚圖々々してゐると社へ間に合はないぜ。』

お君はまた枕に額を押しつけてしまう。

『昨夜も言ふとほり、君はあんまり氣が弱過ぎるよ。さあしっかりして起きて出かけることだ。どんな世界へでも、こちらが清ければ威張つてはいつて行つていゝのだよ。もし、その男が不潔な要求に應じなければ社を辭めろといふならそれ迄だが――その時には僕たちだつて默つてゐやしない。ネ君はたゞ自分のつとめを怠らなければいゝのだ。』

しかし、お君はなほ顏を上げない。

本田はつゞけた。

『第一、それでは君は清君にすまないぜ。』

清の名が洩れると、お君は僅にまた身を起さうとした。

『それでは折角の清君の好意にももどることにはなるぢやあないか――人生にはだれだつて苦勞があるのだ、あの人の好意を思つたら君はもつと勇氣を持つて働かなければ――』

――ほんたうに、さう言はればさうであつた。これと明らさまな理由もなく、あの社を辭めてしまうことは、清への義理がかける。よしもう一度行つて見やう。支店長は何かの氣まぐれで昨日のやうなことをしたにすぎぬかも知れぬ。そして二度と何も言ひ出さぬかも知れぬ、若し、今日も亦何かつまらぬことを云つたら、その時こそ清に何も告げて、きつぱりとした身のふり方を考へやう――

お君はあやまつた。

『すみませんでしたわ、ほんたうに私いくぢなしよ。』

はかない微笑が、彼女のくちびるに上つた。

『いゝえ、君がいくぢなしではない。世の中の男が馬鹿ものなのだよ。しかし、何でもないさ。馬鹿ものは相手にしなければ何でもないさ。』

本田ははげますやうに笑つた。

――お君はいそいで朝の仕度をした。

彼等の朝飯はパンと牛乳だ。

7

――晝の休みには、またなみ子に出逢つた。なみ子は昨日瞥見した支店長の態度に、今でも興味を持つてゐるに相違なかつた。

『どう?』

と、彼女は意味ありげな調子で訊ねた。

『え?』

お君にはすぐにはわからなかつた。

『あれから、あの人からは何も話がなかつた?』

それでもお君がまた解せないらしいので、彼女は片眼をしかめるやうにして見せた。

『何て、あんたは物のわかりが遲いのでせう! あの人ツてばあの人さ――支店長さ?』

と、最後の一句はさすがに聲を低めていつた。

お君は、その名を聽いたゞけでも、全身にゾーッと冷水をかけられるやうな氣がした。

彼女はうなだれた。

『何かあつたに違ひないと私は思ふのよ、あの人の目つきは、昨日たゞごとではなかつたから

――』

なみ子はかうしたことにかけては、いかなる占星師よりも見とほしが利いてゐるのだつた。

『かまはないからどし〳〵やるものよ。役に立てゝしまつたら、その時はその時でいくらも考へ様があるわ。だれが、こんなところで僅ばかしの月給だけで生きて行けるものですか？化粧品を買ふだけのたしにもなりはしない――だれだつて、勝手なことをしてゐるわねえ、あなたはよつぽどおボンちやんだから氣がつくまいけれど。』

お君は、なみ子にさう言はれてはじめて思ひ出すのであつた。いつぞやこの女と銀座を散歩した時さんざ贅澤な品物を買つた上に、自分にまで立派な一組の化粧品を買ひあたへたことを――その時、お君は、彼女の紙入れの中の豊富なのに瞠目したのだつた。

――して見ると、この人も何か暗いことをしてゐるのだらうか？　そしてあんなに氣儘をふるまつてゐるのだらうか？。

さう考へたゞけで、これまでこの會社の中で、たつた一人の友だちと思つてゐたひとまでが恐ろしい存在として思はれるやうになつて來た。

『まあ、あんまり心配しないがいいことよ。蔭でどんなことをやつたつて、あなたの戀人に一々わかるわけではなしサ。』

なみ子は、さんざコンパクトで顏を叩いて、プイと行つてしまつた。

お君はとりのこされて、亂れた髪を直し、手を洗つてオフイスの方へ歸らうとした。

すると、廊下の曲り角で、思ひもかけぬ人に出逢つて、彼女は棒立になつた今日今まで顏を見せなかつた支店長とバツタリ出逢つたのだつた。

支店長は、彼女が目を反らすひまもなく、もう笑ひかけてゐた。

昨日あゝいふことが何もなかつたかのやうに――

『やあ、どうです？　御氣嫌は？』

お君は立つてゐられなかつた。彼女は壁際へのがれて、兩手で顏を蔽うてしまつた。

支店長は、さうした彼女の態度にすこしも介意しないやうに、笑ひをふくんだ聲でつゞけた。

『そのうちに、ゆつくりまた御飯でも食べますかな――昨夜はとんだ失禮をしてしまつて――すこし醉つぱらつてゐたのでせう――』

支店長はすぎ去つた。彼女は彼の笑顏を、いかなる怒りの形相よりも怖ろしく思つたのだつた。

――お君はオフイスの机に坐つた。

しかし彼女はうしろの方にたえず視線を感じてゐた。それは支店長の、あの責めるでもなく怒るでもない、薄氣味惡い笑みを含んだ目付だつた。

――あゝ、たまらない！　私はもう辛抱出來ない。

彼女はなみ子の言葉を聽いてから、一さうこゝに居憎くなり、長くゐたら最後、屹度その穢れの中に自分も亦染つてしまふにちがひないやうに感じられて來るのだつた。

彼女は何かのきつかけで、支店長の方を振り返つた。すると、案の定、そこにはあの鋭い、しかし好色らしい目が彼女を待つてゐた。

お君は慄然として向き直つた。

彼女はそれからといふもの仕事が手につかなくなり、壓迫的な畏怖觀念のみが暗く重苦しく押しつけて來るのだつた。

『何だか元氣がないね？』

と池永はたづねた。

『氣分が惡いんなら早退けにしてもいいが――』

『いゝえ、何でもありはしません。』

と、お君は答へて、うつむいてまた仕事にかゝつた。しかし誤字や脫字が多く、自分ながら

自分の氣弱さがうらめしくなつた。

支店長の目はしばらくすると、彼女を見なくなつた。彼は例の來客どもに引ツぱられて、どこかへ交際のために出かけねばならなかつたのである。

お君は、今日の歸りは安心だつた。けれども、支店長のどこまでもまつはりついて來る粘つこい視線を考へると、明日からのことが思はれてならない。

――私、吳芝さんに相談しやう――

と、彼女は歸り仕度をしながらひとりごちた。たとへこのみせをつゞけるにせよ、止めるにせよ、一應は清の意見を聽く必要があつた。そして、清は、おのづから、本田とはまた格別な意見を持つてゐるかも知れないのだ。

彼女は歸りぎはに、清のアパアトへ電話をかけた、この頃外出をすらつゝしんで始終部屋の中で卓に向つてゐる清は、勿論今日もゐた。

彼はお君からの電話だと知るとひどくはづんで答へるのだつた。

『ちよいと御無沙汰したので、どうしたかと心配してゐたのですよ』

と、清は言つた。

『出來るだけ早くいらつしやい、二人で夕飯を食べませう。』

『えゝ、出來るだけ早く伺ひますわ！』

お君は世にも樂しげに答へた。

同じ夕飯の申しいでゝも、支店長のそれと清のそれとはどんなに違ふことよ——

彼女はいそ〳〵として電車に乘つた。清のアパアトに着いた時にはもう外濠の松の上に淡紅い夕ばえが流れてゐるころだつた。

彼女は階段をかけ上つた。

清の部屋の前に立つと、さすがに胸が躍つた。

清の方でも、待ちかまへてゐたに相違なかつた。しかし、彼は出來るだけ心の動搖をかくさうとしたのであらう——ドアが輕く叩かれた時、彼は卓に向つたまゝで答へた。

『おはいり』

で、彼女は開けてはひつた。清は書きかけの原稿をそのまゝに立ち上つて迎へた。

8

——清はお君と顏を見合せるとしかし、今までの虚勢を張りつゞけることが出來なかつた。彼は兩手をひろげて、お君を抱き寄せるやうにした。お君はその腕の中へ恁れ込むやうに仆れ

かゝつた。はじめての抱擁だつた。

すると、全く思ひがけなく、彼女の咽喉が窒り、涙が流れ出した。

『どうしたんです？　君。』

と、清は驚いて訪ねた。

『泣いてゐるんぢやないか？』

清はのぞき込んだ。お君は清の胸に頭も頰も押しつけてしまつた。

清は不安な目つきをした。

『何か哀しいんです？　どんなことがあつたんです？　社でゞすか！　家ですか？』

清はお君を藤椅子までつれて行つて掛けさせた。お君はハンカチで顏をかくして咽び泣いた

清は彼女の手を把つた。

『話しなさい——默つてゐてはわかりません。』

それを話しに來たのだつた。訴へに來たのだつた。けれども、お君には急には語れなかつた

彼女は存分に泣いた。そして咽び泣きの隙にやつと言ひ出した。

『私、折角世話をしていたゞいたんですけれど、あの會社にはもうゐられませんわ——それで

そのことを申し上げやうと思つて——』

『どうして？』

と、清はたづねた。しかし彼の若々しい眉がひそんだのを見るとくはしい説明を求めるまでもなく事情を直覺したに相違なかつた。

お君はしどろもどろに説明した。

『――それで、そのほかにもいろいろ厭なことを見たり聽いたりするものですから、あゝいふところに長くゐると、屹度、あなたに不愉快な想ひをさせるやうなことがあるかも知れないと思ひますのよ――』

お君は、はづかしさと恥辱とを感じながら語つた。

『いかんなあ――そんな男かなああの人が――』

と、清はまさかに、支店長がそんな人物とも思はなかつたので、呆れたやうに呟やいた。そして、勿論、彼にしても、さういふところへお君を置いておくわけには行かないと考へた。

會社を辭めるといふ相談はたちまち出來上つてしまつた。お君は本田が獨立した家を持たうと計畫してゐることなどを話した。すると二人の胸に同時に上つたのは若し彼等二人が、家庭を持つことが出來たならどんなに幸福だらうといふことだつた。

二人は、さつきの抱擁以來、もう愛の表白に何等のためらひも感じなかつた。清は彼女の目

をみつめて囁いた。

『僕は運命の不思議さにぴつくりしてゐるのですよ。あの晩君に逢つた刹那から、僕の生活はすつかり變つてしまつたのです。』

『私だつて――』

と、彼女は口ごもつて答へた。

『私だつて、あの時からあなたが好きでしたわ。そして自分が何も出來ない馬鹿な娘だといふことが殘念でしたわ。』

今後のことについては、ゆつくり相談することにして、二人は若い戀の甘い陶醉に身をまかせた。で、二三日中にはどこかへ野遊びに行かうと約束して惜い別れを告げたのだつた。

邪目

1

清はお君を社から退かせやうと決心すると、彼の清潔な氣持から一度藤島にこのことを告げ知らせて置かなければならぬと思つた。

それで翌日、書き上げたばかりの短篇小説をふところに入れると夕ぐれの涼風を見はからつて、先輩の住む高臺町をさして出かけた。

彼が行きついた時、藤島の書齋はいつもの定連で一ぱいだつた。藤島は何か居催促の雜誌記者につかまつて、原稿紙に向つてペンを走らせながら、例の元氣な調子で時々みんなの無駄話の仲間入りをしてゐた。そこには親友の古瀨もをれば、W大學の教授で小說家として名のある谷山正二などもゐた。谷山の饒舌は有名なもので、とめどもなく紙卷をふかしながら、他人にはわからない樂屋落ちの駄酒落でしやべり立てゝゐた。その相手になつてゐるのは古瀨だつた。

古瀨と谷山との物語は、山の手のさるカフェのおかみとの仲が、姦通罪を構成するか否かに

ついて論議してゐた。そのほかの、年の若い二三の記者どもは中年文士たちのとめ度もなく放逸な物語を聽いて、呆れ返つた顏をしながら、將棋を指してゐる手を止めたり、番茶をガブガブ呑んだりしてゐるのだつた。

『そりやあ、君、一ぺん牢屋へ行つて來るといゝんだぜ、あすこはなか〳〵面白いに相違ないよ。』

と、藤島がペンを止めずに口をはさんだ。

『君こそ行つて來るがいゝよ。』

と谷山はやり返した。

『待合あそびも大ていあきたらうからなあ。』

『いや、なか〳〵倦きはせぬよ、あの社會だつて私立大學教授位な優物はたく山ゐるからなあ。』

谷山は笑つてしまつた。彼等はどんな無禮な事を言ひ合つても怒りもとがめもしなかつた。そこにこの連中の極端な親しみと、極端ななげ遣りとが感じられた。

清は彼等のさうした態度に、不快なものを思はざるを得ないのだつた。

しかし、その中に、みんなの喫煙と雜談中に、藤島は原稿を書き上げた。雜誌記者はその原

稿を引ッたくるやうに取り上げると辭し去つた。もう〆切の時日がとうにすぎて、今や來月號に間に合ふか合はないかの境になつてゐるに相違なかつた。

それにつれて客人たちはだん〳〵に歸つて行つた。すつかり夜になつたころ、ゐのこつたのは、清一人だつた。

藤島は例のいたづら氣があらはれすぎてゐる目で、じつと清を見た。

『で、君はまた何か用事を持つて來たらしいね。君は、このごろ始終考へ込んでゐるやうだが——』

清はまごついた。彼はあはてゝふところから書き上げた製作を取り出した。

藤島は、ろく〳〵彼の製作は讀まなかつた。信頼してゐるものにだけ對する不忠實さが聽取された。藤島のさうした容子は、清を十分に歡ばせるのだつた。

『よし、明日新世界の主筆へ電話をかけて置くから、持つて行きたまへ。あそこは稿料は安いが、格は惡くないよ。』

で、原稿の始末はついた。この次は言ひにくいお君の身の上だつた。

清はやつとのことで話し出した。別に支店長の名を出したわけではなかつたが、あゝいふつ

とめはお君のやうな性格には向かないやうに思はれると話した。

藤島は相變らずのニヤ〳〵笑ひをうかべて、じつと清の顏をみつめるのだつた。

『どつち道、僕には何の關係もないことだよ。その娘さんが君に何か話したところでかまやしないよ。美しい娘さんを大勢の男たちの中に置くのは、君として決して愉快なことでないのはわかつてゐる。』

清は辯解はしなかつた。藤島のこの毒舌がはじまつたら、相手になつてゐたら果てしがないのだつた。藤島の饒舌はつゞいた。

『僕はだから決してすゝめはしなかつたのだよ。君が若しその淑女に忠實であるとすれば、決してあんなところへ入れるものぢやあないんだ。そんなことははじめつからわかつてゐる——男といふものは、いつでも女性のためには全身の力を盡さなければ駄目だよ。』

藤島の言葉はもつともだつた。清もうなづかざるを得なかつた。

『君は絕對に方向をあやまつてゐるよ。若いくせに馬鹿だなア。』

藤島はさもうまさうに紙卷の煙を吐き散らして、清の顏をのぞき込んだ。

『しかし、今後の方策は何とか立つてゐるかね？』

『さあ、まだ何もきまつてはゐないのですが——』

『君が同棲してしまつたらいゝぢやないか――娘なんてものは、ほつて置いたらすぐ蟻がついてしまうぜ。』

蟻がつくが、清を笑はせた。といふのは彼等が共通の女友達である夫人が、夫婦喧嘩の揚句たつぷり砂糖のはいつた清涼飲料をあたまからかけられて、明方寝起きに髪をなでて見たら一めんに蟻がついてゐるのを、仲直りに良人が一匹一匹拾つてやつたといふのだつた。

それで清の心もほぐれた。

『どうだ？　戀人は戀人だ。久しぶりでつき合ひたまへ。』

ぼがらかに晴れ澄んだ夜だつた。二人はすつかり窓をあけ開いた自働車で下町へ降りて行つた。いつも混雜してゐるのに不思議に今夜に限つてガランとしてゐる大カフェの二階に坐つた時、藤島は例に依つて女給の指先なぞをまさぐりながら言ひ出した。

『僕は女性をます〳〵嫌惡して來たよ。こんな場合には緩和劑が必要だ。君の若い純潔な戀人にでも逢はせ給へ。』

清はこの言葉が藤島の唇から出ることをとうから怖れてゐるのだつた。藤島が彼女を見たら決して清らかな判斷ばかり下すはずがないのだつた。彼等一味の遺口に從ふと、いつも女性は娼婦か女驢馬であるにすぎなかつた。たとへ貴婦人であるにもせよ、處女であるにもせよ――

清は戀人を、そのやうな目で見られるには忍びない。しかし藤島は人の惡い目つきで言ふのだつた。

『何といふ自信力のない男だらう――僕たちの仲間に入れて、君への純潔を忘れる位なら、何も心配するには及ばないじやあないか――そんな娘はひとりでに穢らはしい尼寺へ歩いて行つてしまうよ。』

で、清は藤島の自動車を、すぐに本田の寓に走らせることにした。

2

――藤島といふ人間が、稼業柄とは言へ、どのやうにあらゆる異性を抱きつゝあるか、また目に觸れるほどの女性を、一々どんな風に眺め、且考へてゐるかを、清はよく知つてゐるのだつた。

藤島の女性鑑識眼は、あながち冷酷なものではなかつた。言を換へて言ふと、どんな微かな美點でも、女性のからだや氣持から見出さないといふことはないと言つてもよかつた。

『あんなつまらん女――』

なぞと、友達のだれかゞ某女を批評する時、彼は口元に歪んだ微笑をうかべてすぐに抗議し

た。

『いや、あの女を全部つまらんとは言はれぬよ。あれは口は大きいさ。鼻は低いさ。しかし髪の毛の縮れつぷりが面白いし、それに目つきは熱烈だぜ。あゝいふ女は一度思ひ込んだとなると途方もないかも知れない。屹度さうだぜ――あの女の戀は熱烈なものにちがひない。見てゐたまへ。』

その女が戀をはじめて、彼の豫言が適中する。彼は遠くから得意げに微笑した。

『見たまへ、君、あの女はあの人が面食つてしまつた位熱烈じやあないか。』

だが、いけないことには彼は女性を口で稱揚するやうな場合でも、心の中では無限の憎惡を以て、彼女等を上衣を取り、袴を脱がせ、下袴からストッキングまで奪つて、ニヤリ〳〵小氣味の惡い笑ひをうかべながら、

――おすましさん！　いくらすましたつて駄目だぜ。ソラ、そこにもこゝにも、きたないしみがついてゐるじやあないか――いくらじつとしてゐるふりをしても、そこもこゝもそんなに蠢動してゐるぢやあないか――

と、呟いてゐるに相違なかつた。そして、いつも口に出して云つてゐた。

『女を愛したつていゝさ。しかし女が男以上にけものじみてゐないわけではないといふことを

考へる必要があるね――』

彼はおそらく、純潔とか貞淑とかいふものをハツキリと意識することさへしなかつたやうに見えた。ある時、彼が相變らずの微笑で清にさゝやいたことがあつた。

『キリストは人間を知つてゐたよ。氣が咎めないものが、あの淫婦を石打てと言つたじやあないか――さすが密通の腹から生れた男だ――』

そんな兩性觀に生きてゐる藤島の前に、お君のやうなむすめをつれ出すことは、清には忍べない氣がした。彼女のことをも、彼が心の中で、どんなにさげすみ嗤ふかきまりきつてゐることだつた。

しかし、藤島からお君に逢ひたいと言ひ出された以上、清にはそれが拒めなかつた。で、迎への自動車を出したわけだつた。

お君は、あまり待たせず遣つて來た。彼女はひどく羞恥にみなぎりながら、白い上衣に淡紫いろのスカートではいつて來た。その服裝は、ついこないだ、清が見立てゝ届けさせたものだつた。

清は藤島に彼女を紹介した。

『さあ、掛け給へ！　清君の親友を僕はお見知りする必要があるから、僕から願つて來ていた

だいたのですよ。飲みものは何を上りますか？』

藤島は愛想よく言つた。お君は清に、本田が恰度出かけたあとで同伴することが出來なかつたことを話した。

女給は吟味するやうな目で、お君に近づいて、薄綠いろの清凉飲料を、彼女のためにすゝめた。

――藤島はさすがにお君の方を女給やその外のおなじみ女たちを眺めるやうなむきつけな目では眺めなかつた。彼はしたしい妹でもなぐさめるやうな口調で話してゐた。

『會社をお辭めになるさうですね？』

『えゝ――私なんかには――』

と、言ひかけて、お君はうつむいて、淡綠な飲みものゝグラスをいぢつて、口をつぐんだ。

『第一、君、清君。』

と、彼は清の方を眺めて、

『君がまちがつてゐたのだと僕は思ふよ。』

清はびつくりしたやうに藤島をながめた。

『僕が間違つてゐましたつて？』

『まづ。僕はさう云ひたいなア。』

と藤島は頬杖をついて云つた。

『僕がきみ子さんがどんな方だかを知つてゐたら、あの時あんな紹介狀なんぞは書かなかつたと思ふよ。』

清もお君もいぶかしげに相手を見た。

『何も不思議がることはないじやあないか？　なぜつて、君、きみ子さんのやうに美しくつて柔しい娘さんは、全然あゝいふ勞働には不向きなのだよ。あれは、荒くれた男たちで硬めた世界で、そこへはいつてゆくには、男まさりの氣性の女か、男といふ男を知り拔いた女か、それとも男といふ男にもうかへりみられなくなつたやうな女か――さういふ連中でなければ不向きなのさ、あゝいふ職業を美くしい柔しい娘がどれほど一生懸命になつたつてやり通せるものではない――もつとも、あゝいふ世界で働いてゐる男たちから愛を求められた時、いつでも身を任せる覺悟が出來てゐれば別だがね――普通の女には普通の女としての道があるさ――ことさら美くしい若いひとたちには――それだけのことは、清君だつてわかつてゐさうなものだ。』

『しかし、僕は自分だけの仕事を働いてゐる女性ほど美くしいものはないと思ふのですが――』

と、清が答へた。

『そりやさうさ、多くの場合にはそんなこともあるさ。しかし、君子さんには全然それはあてはまらないよ。』

清は默つた。お君は、いぶかしげに藤島をみつめた――自分が話題に上つてゐるので、彼女は熱心になるばかりだつた。

藤島は清からお君へ目をうつした。

『君の場合には話が全然違ひますよ。わかりませんか？』

『えゝ？』

お君はうなづいた。

『それが判らぬとは全く不思議です。』

と、藤島は微笑した。

『君は鏡を見たり姿見で全身をうつしたりしたことがあるでせう。それから多くの女たちが澤山集まつてゐる――たとへばみんなが裸體でむらがつてゐる錢湯、そんなところへ行つたことがあるでせうね？』

お君はます〳〵わからなくなるのだつた。

『そんなところで、氣をつけてごらんなさい。大ていの場合、君が一ばんうつくしい。たとへばこの有名なカフエーへ來てもね。して見れは、さういふ萬人にすぐれた財寶を、美貌を、美しいすがたを十分に利用することを――直接に利用することを考へるのが、君としての人生への義務と言つてもいゝのですよ。』

彼はたのしげに笑つてお君をのぞき込むやうにするのだつた。お君は紅くなつた――紅くなつてうなだれた、しかしどこからよろこばされたには違ひなかつたのである。

3

――藤島は、お君の顏に上つたどんなかすかな反應でも、見のがす男ではなかつた。

『ねえ、さうでせう？。ランニングの選手は駈ることだ。ジャンプの選手は飛ぶことだ。みにくい貞女もいゝだらうし、美しい毒婦だつて惡くはない――いづれにせよ弱點によつて生きやうとせず、美點を充分にはたらかせるのが、人たるものゝ務めですよ。人間にとつて何が罪惡だと言つて、世の中を感動させる力を持ちながら、自分から亡びてゆくことほどいけないものはないのだ。現在――』

と、彼のいたづらさうな目つきがきらめいた――

『現在、君は、この清君をどんなに勵ましたり突き進めたりしてゐるか――君を見、君を愛する男は、君に氣に入られやうために、一生懸命に全力をつくす。だれだつてさうさ――たとへば僕にしたつて――』

藤島はニヤ〳〵笑ひをうかべた。

『僕が若い青年だつたら、君を一目見たら、屹度十晩位は眠れなくなるだらうと思ふよ。』

お君はいよ〳〵うつむいてしまつた。うつむいて淡いろのハンケチを、つゝましく揃へた膝の上で疊んだりのばしたりするのだつた。

――まあ――、藤島さんて、何てお世辭な方なのだらう――、私そんなに美くしくなんかないのに――。

彼女は頰が火のやうにほてつて咽喉が干いて來た。

『まあ、仲よく愛し給へ。』

しかし、その頃の藤島の言葉はひどくだしぬけに淋しげな語韻だつた。

『愛し合ふといふことは、たとへ一刹那だつて、いゝ想ひでをのこすものだ。』

彼はウイスキーグラスをぐいと干した、清はさそはれたやうに先輩を見上げた。藤島の目か

らは、いたづらさうな、意地の悪い微笑がすつかり消えて、そのあとには哀しげな、孤獨な、何とも言はれない感傷がみなぎつてゐた。

――何といふ感情の變化だらう――清は心に言つて見て、こんな風に先輩の氣持が動いて來た時には、その果てにどんな怖ろしい亂醉の世界が來るのかを豫見することが出來るのだつた。

彼は師匠の心にこの種の寂寞をもたらしたのが、自分たち二人と思ふと、今夜この人を一人ぼつちにしては置けない氣がした。お君を歸して、介抱役に廻らうか――

が、まるで彼のさうした心の中を見て取つたかのやうに、藤島は清に言つた。

『君、もうお歸りになつたらどうだ。』

『しかし、先生はこれから――』

『いゝよ、いゝんだよ、僕のことを問題にすることはないさ――僕にはちやあんとこゝにもこんな戀人がゐるんだもの――ねえ、令子。』

藤島は女づれなので、いつもより遠慮深くしてゐた柴いろの女給の方をかへりみて笑つた。

清は一ぱいだけウイスキーを飲んで、お君と共に藤島のテーブルをはなれた。

外はにぎやかな、夏の銀座の宵の口だ――二人はあらゆる男女がこの歩道でするやうに肩をすりよせるやうにして歩き出した。

『君は藤島さんをどう思ふ？』

と、清はたづねた。

お君は急には答へなかつた。

『私にはわかりませんの。』

——全く藤島の人物が、お君のやうな小娘に見當のつくはずはなかつた。

いゝ人間なのか悪人なのか、それとも、案外、原稿紙をよごして人氣を取つてゆくだけが才能の人間なのか、清のやうな親近者にさへ、見届けることは出來なかつた。しかし、兎に角、彼がお君の面前で、例の通りあけすけな口調で、彼女の美を說き、美の力を說いたことは、恐らく、藤島自身が豫期した以上の効果を、このうら若い一少女の胸にあたへてしまつた。

藤島のやうな、一般から女性通を以て云はれてゐる人物からの、あの力のこもつた證言は、いかにつゝましく內氣な彼女をも動かさずにゐなかつた。

——私はほんたうにそんなに美しいのか知ら？あの方にさへも讃められるほど？。

さう彼女は、明るくにぎはしい銀座通りを、清と並んで歩みつゞけながら考へて見るのだつた。

——あの方は、私ほどの娘は、廣い世の中にもさう澤山はないと仰言つたね——。

で、彼女は前後左右を眺めまはす、さも幸福さうにサツパリと夏着を着かざつて男たちと連れ立つて歩いてゐる若い女たちを注目する。すると、なるほど衣裳や裝身具こそ彼女に立ちまさつて居れ、たれ一人として、見るに足りるほどの織縹を持つたものはゐないやうに思はれて來た。彼女は自分が綺麗な顏だといふことを、これまでも何度か聽いたことがある。たとへばあの支店長にしても、隨分それを言つたものだ——ほとんど藤島と同じ言葉が彼の唇を漏れたと云つてもよい。しかし彼女は彼を信じなかつた。たゞ處女を奪はうとする悪漢の誘惑の言葉としてのみ聽いてゐた。

が、藤島の場合は、彼女は信ぜざるを得ない——彼は彼女を少しもいやらしい目では見なかつた、——そして清との戀にさへ贊意を表してゐるやうに見えた。

それに、彼女は、美をたゝへられた言葉より以上に、美の力について彼が語つた幾言かを思ひ出さないわけにはいかない。彼に言はせれば、女は美くしいといふことが第一の美德だつた——女性の力として美ほどすばらしいものはなかつた——そしてその力を持つたものは、自由自在にそれを驅使すべきであつた。

——では、私なんかでも、ほんたうに澤山の男のこゝろを、突き動かすことが出來るのか知

ら――。

彼女は、かたはらにゐる清をもその瞬間忘れてしまつた。

彼女はいつか讀んだか觀たかした。外國の芝居を思ひうかべた。それは一人の美女のために母あるものは母を忘れ、妻あるものは妻を忘れ、主も子も忘れて彼女の愛を爭ふ多くの男を描いたものであつた。

すると、幻影の中で、今銀座を歩いてゐるあらゆる男が、すべての愛人を捨てゝ自分を追ひかけて來るのであつた。

『タキシイに乘らうか？』

清が云つた。で、彼女は幻影から醒めて、靑ざめた。彼女は罪を感じた。

――私はどうしたのだらう？。

『えゝ。』

と、うなづいた。しかし宿まで送つて來た清が本田といろ〳〵な物語をはじめてもその仲間入りを彼女はしなかつた。

彼女は自分の机の上に小鏡をのせて、しみ〴〵と顏をうつして見てゐた。

そして自分の顏のどんな微細な點をも十分に吟味して見ようとするのであつた。

3

――お君は生れてはじめて自分の顏に見とれるやうな思ひで鏡に見入つてゐる間、本田と清とは、冷やしコーヒーを啜りながら遠慮なくしやべつてゐた。

本田は今夜お君が藤島に逢つたと云ふことを、逢はせた清を非難こそしなつたが、すこしもよろこばないに相違なかつた。

『僕はどうも、あの人の目つきが氣に入らないんだよ。あの人が物を見る目は、笑つてゐるのだか、嘲けつてゐるのだか、愛してゐるのだか憎んでゐるのだかわからないのだ。いつだつて、あの人はたゞ妙な微笑をうかべてゐないことはない。一たい眞面目な場合に笑はれて氣味のいゝことがあるかね？　あの人は僕が心臟をやられた時、病院へ見舞に來てくれて、枕元でニヤ〳〵笑つてゐたのだよ――

君、苦しいかね？　つて――その時には別に腹も立たなかつたがあとで、僕は齒噛みをしたものだ。畜生！　と飛び上つたよ。何だか、ひどく複雜で、不氣味で、肉食獸の目のやうな氣がするんだ』

『そりやさうさ、僕だつて、あの人がひどく可愛らしい小禽や、美くしい花なんぞを見て、例

の微笑をうかべてゐるのを見ると、小禽や花が萎れやしないかと思ふことがあるんだ――その癖、あの目が僕達に一種の刺戟をあたへるものだから――』

『あれは君、魔の目だよ。』

本田はやけに莨の煙りを吹いた。

『あれは邪目つて奴なんだ。僕は嫌ひさ、だからこのごろ出來るだけ遠のいてゐるのだ。』

清は、本田が考へるまでに、藤島をよこしまなものだとも思はなかつたに違ひないが、それでも、今夜彼をお君に引き合せたことに何がなしの不安を感ぜざるを得なかつた。

――師匠はあの人をあんまり讃めちぎりすぎた。あゝいふことは決していゝことじやあないんだ。

彼はお君をかへり見た。

お君は、その時彼等の力を眺めてはゐなかつた。彼女はもう鏡こそ見てはゐなかつたが、枕に頬杖をつくやうにして、何やら深い物思ひに落ちてゐた。

彼女の瞳は夢ましかつた。

――ほんとうに私がそんなに美しいとすれば、決して清さんに嫌はれることなんかある筈はないわ。

彼女はそんな風に考へつゞけるのだつた。

――私はこれまで、清さんがどし〳〵えらくなつて行つた時、私ばかり物知らずな調子の低い女では、結局かなしいことになるだらうと、そればかりを案じてゐたのだけれど――。

お君は世の中が明るくなり、生活が生々として來た氣がした。

彼女はこれまであまり高聲で笑ふこともなかつた。恒に自分はどんな女よりも内氣で、引込み思案でなければならぬと思ふ程、人生から壓しつけられてゐた。それが不思議なことには、藤島のあの物語りに依つて、これまでの重壓が安々と取りのぞかれてしまつたのだつた。

彼女はあくびをした。

『お君ちやん、眠いか？』

と、清が言つた。彼女は微笑した。

『いゝえ、眠たかないわ。』

その語韻には、若し相手が細心の注意を拂つたなら、必ず驚愕したらうほどの明るさが添はつてゐたのだつた。

誘惑

1

――お君が折角得た職業を捨てたことに關しては、本田も別に異義がなかつた。彼もこのごろはなか〳〵仕事が進み、且つ書けば書くだけ、勿論安い稿料にはせよ金がはいつて來るのでお君一人位の食扶持を問題にせずともよかつた。そして、いつか四百圓ばかりの貯蓄も出來たから、長い間の望み通り、まがりなりにも一家を構へることも可能になつて來た。

めつきり暑氣が增した或日、朝からどこかへ出て行つた本田は、夕方になつて汗みどろになつて歸つて來た。

『いよ〳〵引ッ越しだよ。』

『え？』

『いよ〳〵引ッ越しをするのだ。今日荻窪の早瀨の家へ行つたら、つい側に、小ぢんまりした貸家をみつけだしたのさ。不景氣で、なか〳〵借手がないから、敷金もいらないといふのさ

尤も前家賃だがね。二十五圓で二疊の玄關の外に三間あるんだよ。蚊がひどいさうだけれどその位の我慢するんだなあ。』

お君も目をかゞやかした。彼女も二階借の窮屈な生活からのがれることが出來るのはうれしかつた。他人の家では、いかに遠慮するに及ばないとは云へ、何かにつけて困ることも多かつた。

『水道はないがい〻井戸があるよ。臺所なんかなか〳〵明るく出來てゐる。君が炊事をしてくれるにもあまり困らないだらうと思ふ。』

『い〻わねえ――私、いくらでも働くは。』

と、彼女は言つた。

全く、あらゆる女性は、人妻であるべく、主婦であるべく運命づけられてゐた。一家を持つて、萬事を自分の手で所理して見たいといふ慾望は、お君のやうなら若い娘にも當然あるべきだつた。

『私、決してあなたを失望はさせないことよ。で、いつ引ッ越すの？』

『もう一週間で月が代るだらう。今月中こゝにゐて、來月のついたちに越さうじやないか――臺所の道具や何か少し買へば、すぐに立派な家庭が出來上つてしまうよ。』

本田はいつにないおしやべりをすると、近所の錢湯へ汗を流しにゆくために、手拭を下げて出かけた。

本田が行つてしまつてから、間もなく、階下のガスをかりて煮物をしてゐるお君のところへ名無の封書がとゞいた。何がなしにいぶかしい氣持で、封を切つた。思ひがけない人からのたよりで、中に帝劇の切符が二枚はいつてゐた。

藤島が、最近上演されてゐるアメリカのレヴユウ一座を見に來いといふのだつた。だれを連れて來てもよろしい。本田でも、清でも誰でも連れて來るがよいと書きしるされてゐた。

『まあ、私なんかにどうして切符なんか下すつたのだらう？』

彼女は呟やいた。彼女は多少とも得意でもあればうれしくもあつた、はじめて相當名のある人間からたよりを貰つて、何等かの感情をいだくのは當然だつた。

彼女は二階へお膳の仕度をしてから、窓際へ行つて、またよみかへして見た。

すると、そこへ本田が歸つて來た。

彼はゆえ知らず、手紙をかくさうとしたが間に合はなかつた。

——何も、藤島からの手紙を、本田の前で秘しかくしにする必要はないのだつた。しかし人

間には妙な心理があつて、隱さずともいゝことを隱して見るやうな本能がある。お君の今の場合がそれだつた。

彼女は本田が錢湯から歸つて來た時、藤島の手紙をあはてゝふところへ入れさうにした。すると、却てそれが本田の注意をひいてしまつた。

本田は最初の中は多分清からのたよりとでも考へたやうに、ニヤリと薄笑ひをうかべたゞけだつた。しかし、その時、お君の頰に、ある當惑の色があらはれたのを見ると、本田の方でもある疑惑を感じたに相違ない。

彼はツカ〳〵と近づいて、手を差しのべた。

——手紙を渡せといふやうに——

お君はむしろびつくりしたやうに、本田を仰いだ、これまで本田が、年上の從兄として、また保護者として、當然壓迫的に出なければならぬ時でも、決してそんな態度を見せたことがなかつたので、お君はなほさらハツとしたのだつた。

『見せ給へ。』

と、本田はいかつく言つた。

お君は怖れた。

彼女は本田が、藤島を職業上の先輩として多少の尊敬を拂つてゐるにも拘らず、人格的に極端に嫌悪してゐるのを知つてゐた。

お君に取つては、しかし、藤島はいくらかならず恩義を感ぜねばならぬ位置にあつた。

彼女は少女らしい身贔負で、藤島をあまりに惡しざまに言はれることを好まなかつた。

彼女は手紙を渡しかねてためらひながらうなだれた。

『見せたまへ。』

と、本田は一歩すゝんで繰返した。

お君はしかたなく封書を渡した。

『何だ名前も書いてないじやあないか?』

さも輕蔑したやうに彼は呟いて荒つぽく中味を引き出した。

『ほう、藤島さんが――何だつてまた君にこんなものを贈つて來たのだ?』

と、彼は芝居の切符を、さも穢らはしいものを摘むやうにして云つた。

『僕か吳芝と一緒に來いといふなら、何も君へあてゝよこす必要がないじやあないか?――いいえ、僕にはあの人の心理はよくわかるんだ。君へあてゝ送つて置けば、そこに君の自由裁量の餘地がのこされてゐるからなあ――』

お君は本田をみつめた。

『わからないかね?』

と、本田は一さう嘲笑した。

『たとへば、君が僕たちを誘ひたくなければ、さそはずともすむじやあないか――ね、君は藤島さんと二人だけでも芝居に座つてゐることが出來るわけなのさ。あの人は小說家だけに、そんな女性心理を摑むのはお得意なんだよ。』

本田は手紙と切符をお君に返さうとした。

お君はうけなかつた。彼女はこの時ほど、心底から本田を憎んだことはなかつた。いかに何でも、そこまでひとをいやしく見る必要はないではないか――藤島を呪つてどんなことを言ふのもまづよいとして、自分のことまで、とやかく憶測する權利があるだらうか?

『何を君は不服さうな顏をしてゐるのだね。藤島を惡く言つたからかね?。兎に角、僕はあの先生を嫌いなんだよ。それはハツキリ知つてゐて貰ひたいものだ。』

本田は机の方へ歸つて、荒々しく團扇づかひをはじめるのであつた。

2

――お君は本田の方は見なかつた。いかに自分が貧しく育つて來て、今も從兄のかゝりうどになつてゐるとはいへ、それまで墮落した考へは持つてゐない――そんな自分だと思つて、輕蔑を心に抱きながら世話をしてくれてゐるのならたとへ乞食をしてもこのまゝでゐたくはない――をとめごゝろに彼の女は突きつめてそんな風に考へるのだつた。

もしまた、藤島がそんな穢れ果てた氣持の男であるとしたら、表面から皮肉まじりでなくいつてくれたらいゝではないか――

かの女はお膳の上に、心づくしの皿をならべて置いたが、塵よけにかけた布巾を取つてすゝめる氣もなかつた。やたらに哀しくなり、物足りなくなり、たうとう涙がボト〳〵と落ちはじめて止まらなかつた。

本田も本田で、一度あんなにハツキリ見せてしまつた不機嫌を、急にカラリと忘れた顔も出來なかつた。彼はいふまでもなく、お君に何等いやしい氣持がないのは知つてゐる。かの女がいかに素直な大人しいむすめであるかを知つてゐる、清への愛が決してまじり氣のないものであるのを知つてゐる。彼がかの女にいきどほりを見せてしまつたのは、かの女が藤島なぞからこんな手紙をよこさせるやうな隙を示したことであつた。でなければ藤島にさう易々と自分の從妹を見くだすやうな素振を見せさせた。本田自身の不甲斐なさをいきどほらずにはゐられな

かつたのだ。

――では、彼は、自分自身に腹を立てゝゐればよかつた。しかし、激し易い若ものとして、いかりを他に移さないわけにいかなかつたのも無理はなかつた。

彼は自分の方からお君をなぐさめねばならぬ番にあるのを知つた――まして、自分達二人はこれから新居をもたうとしてゐるのではないか？　彼としても、故郷を捨て來てから、はじめて一家を成すのである。さうした喜びの前に、藤島なぞといふ遠い無關係な存在から、かれこれ邪魔を入れられるのは不快至極だ。

彼は思ひ切つて、机場を立ち上つて、お君の側へ來た。

お君は彼が近づいたのも氣づかぬやうに、泣き伏しつゞけてゐた。

『どうしたのだね？』

と、彼は立つたまゝでいつた。

『ねえ、何だつて泣きなぞするのだらう？　僕にはわからない。』

お君は顏も揚げなかつた。彼の女の肩は荒々しく搖れるばかりであつた。

『君は僕の氣性をまだよく知らないんだよ。僕はむかツ腹立ちなんだ。しかし、僕に失言があつたのなら詫びるよ。』

お君はせぐり泣きを止めた。彼女は顔を上げて何かいはうとしたらしかつたが、それも出來なかつた。

『ねえ、何が氣になるんだえ？　何が悲しいんだえ？　ねえ――』

――お君にはまだ答へられない。

『さあ、機嫌を直し給へ。』

お君はそこまでいはれて見れば顔を上げないわけにはいかなかつた。

本田はお君の泣き顔をのぞき込むやうにした。涙は美しい娘らしい頰をよごしてゐたが、それが却つて乙女らしさを添て見せた。

『どうして泣いたの？』

と、本田はのぞきつゞけた。

――ほんの詰らぬ一通の手紙から事がもつれて、これまで眞の兄弟のやうにも思はれた本田とお君との間に、何となく一脈の冷たい流れがはさまつてしまつた。お君は本田があゝまで言ふものを、強ひて藤島の招きに應じる氣はサラサラしなかつたが、折角のその人の好意を、本田への義理で無下に拒まねばならぬといふことが、どこまでも氣がすまなかつた。これまで世

の中の下積に暮してゐた彼女に取つては、藤島のやうな派手な世界の人から、かうした招きをうけたといふことだけが、どれほど心を躍らせる歡びであつたか知れなかつたのに――。

で彼女は、決して二度とこの問題について口に出しはしなかつたものゝ、心の中では不滿な想ひを忘れることが出來なかつた。

しかし、移轉の日はだん〳〵近づいて行つた。本田は、あの晩の不愉快な思ひでなぞはすつかり忘れてしまつた風で、毎日彼女をさそつては、小さな買ものなぞして歩いた。蚊帳から座布團から、勝手元の道具から、出來るだけ格安で、見場のいゝものを選んでは買ひ溜めて行つた。

本田はさうしたことが嬉しくつてたまらぬやうであつたが、お君の顔にはよろこびをうかべて見せても、心の中はすこしもなぐさまなかつた。本田と一緒にゐることは、窮屈な繩でいましめられてゐることに他ならぬやうな感じがしてならなかつた。

――これが、清さんと家でも持つのなら！

彼女はさう考へると、荻窪の新居なぞがどんな家でも自分には全くかゝはりのないものゝやうな氣さへされた。

――清さんも清さんだ。アパアトを引き拂つて、一日も早く家が持ちたいと言つてゐる癖に

いつまで私を從兄さんの側へ置く氣なのだらう——

彼女は心から清を信じもし、愛しもしてゐたが、あまりに柔しすぎて、煮え切らないやうなところがあるのが物足りなかつた。彼女は心のどこかで、彼を藤島のやうな人間と思ひ比べて見ずにはゐられなかつた。藤島は彼女が見たかぎりでは、世にもテキパキとした存分に自分の慾望を發表してはじからない男のやうに見えた。

そしてそれが、可憐な少女ごころをひきつけるには十分であつた。

——いやな會祖をやめてしまつて見ると、うら若いお君には長い夏の一日がだん〳〵持てあまされて來るのだつた。彼女はものうい一日を送りながら、これまでにはまだ思つて見たことのないやうな秘密な感情にひたつて行くほかなかつた。彼女の清に對する愛情は逢はずにゐればゐるで攪きたてられ、煽り立てられ、人戀しさでだるい五體が燃えこげるやうな氣持さへした。

いよ〳〵明後日は荻窪移轉といふ夕方、彼女はちよいとした買ものに神田の方へ出かけたついでに、ふと、とある呉服屋の電話をかりて、清のアパアトへ掛けて見る氣になつた。

清は折よくゐあはせた。

彼女はほ〳〵えまされた——清は彼女からの電話と聽くと、何もかもぽろり出して受話器に飛

びついて來たもの〳〵やうに、上ずつた肝高い調子で言ひかけるのだつた。

『あゝ、お君ちやん？　どこから掛けてゐるの？』

3

——お君には清がさもうれしげに電話で話しかけてくれるので、その笑ひがほまで目に見える氣がするのだつた。

『私、今ね、神田に買物に來てゐますのよ。』

そして、かの女はせつかちな口調で、明後日になつたら、愈荻窪へ移ることになつたことを知らせた。

清はをどろいてゐた。

『へえ！　そんなに急に！』

『えゝ、何だか從兄さんが一人でゐますのよ——私はどつちだつていゝんですけれど——』

と、お君は聲を落としていつた。清はたしかに、かの女のその言葉から、若し二人で家が持てるならどんなに樂しいだらうといふ意味のことを、遠慮深く語り合つたことを思ひ出したに相違ない。

かれは話しが途切れた後で言つた。

『君、今夜こちらへあそびに來てくれるわけにはいきませんか！』

お君は、清からの誘ひの言葉を少しもためらふことが出來なかつた。

『えゝ、伺ひますわ。すぐ――まださう遲くはありませんわね。』

『待ちたまへ、時計を見るから――まだ大丈夫、八時半です。』

――お君は清と一週間あまりも逢はなかつたので、話すことが山ほどたまつてゐる氣がするのだつた。かの女は生れてだれも打ち明け話をする人を持たなかつたが、清にだけは何から何まで話せるやうな氣がした。

『伺ひますわ、これからすぐに伺ひますわ。』

かの女は二三反の浴衣地をかゝへて、呉服屋の店を出た。かの女は停留場へ行く道で、名高い菓子屋の前へ出たが、このみせのアイスクリームは、三時間保證付のお土産ものとしてなかなか評判がよかつた。かの女は清にこれまで何ひとつ贈ものをしなかつたことを考へて、アイスクリームを買つた。

停留場で、お君は思ひがけなく、だれかに肩を觸れられた。ふりかへると、出版社でおなじみのなみ子だつた。なみ子には連れがあつたが、その白背廣の青年を、彼女も見覺えてゐた――

――出版社の社長の從弟で、事務見習のために遊びがてら籍を置いてゐる林といふ若ものに違ひなかつた。

不器量な、あまり美しからぬ青年は、かすかに笑つて、眞新らしい藁帽子に手をかけた。

なみ子はじつとりとからだにまつはりつくやうな、白茶つぽい單衣に、青竹いろの帶を締て帶止めに寶石をきらめかしてゐた。どう見ても出版社のタイピストなぞとは見えなかつた。

『あなたは社をやめてしまつたのね？、そして？』

なみ子はお君の頭からつま先まで見上げ見下すやうにした。

『でも、大變仕合せさうねえ。』

お君はこれから戀人の許に逢ひにゆくのだといふことを、なみ子の前で誇つてやりたいやうに思つた。しかし、明るく微笑して見せるだけで止めた。かの女はなみ子が決して愛してゐる青年と伴れになつてゐるのではないことを推量してゐた。かの女が何のために社長の從弟とあるいてゐるかを知ることが出來た――で、着ものこそ劣れ、すこしも自分を恥ぢる必要を感じなかつたのである。

しかし、かの女の乘る電車が來た。

『いそぎますから、いづれまた。』

かの女はいち早く二人を後にして電車に乘つてしまつた。

――なみ子たちに別れて電車に乘つたお君が、やがて清の部屋のドアを叩いた時、相手も待ち兼ねてゐた風で、あまりに早過ぎる位に返事をして戸を開けて迎へた。

二人は顏を見合せた。

清は微笑した。

『どうしたの？　君は考へ込んでゐるやうな顏で僕を見るね？』

お君は答へなかつた。

彼女は、逢つたら堤の切れたやうにいろ〳〵な話をしようと思つたのだが、清の顏を見るとそれが出來なかつた。それほど彼女の胸は歡びにはち切れさうになつてゐた。

『さあ、こつちへ來て掛け給へ。』

清は壁際の長椅子の方へお君を導いて、まづ自分が坐つた。すると、お君は椅子にかけるかはりに清の前に兩膝をついて、兩手を相手の膝にかけてうなだれてしまつた。

『どうしたの？　おや、君はまた泣いてるぢやあないか。』

お君は激しく泣いてはゐなかつた。彼女は頰を清の膝の上に押しつけるやうにしてゐるだけだつた。

『何だね？　また何かはじまつたの？　折角本田君がいゝ家を持つといふのに――君が泣いてたりしちやあ幸先が惡いじやあないか？』

それが、お君をかなしませる種なのであつた。清はなぜもつとハツキリと自分と一緒の生活を望んではくれないのだらう？

『ね、さあ、顏を上げ給へ。』

しかし、お君はかなしくなるばかりだつた、この人はほんたうに私を思つてゐてくれるのだらうか？　藤島のやうな遠い世界の人間でさへ、もつと〳〵積極的に自分に感情を示してゐてくれるではないか？

お君はそれを言はうと思つて顏を上げようとした。すると清のそれと瞳が合つた。清はさすがに感じ易く、彼女の目から甚だしい不滿を讀み取つたらしかつた。

『君は何か言ひたいことがあるんだね？』

お君は言つてしまはうと思つた。

『ねえ、何でもおつしやい？』

清は、手を取つて、顏をのぞき込むやうにした。

『私、ちつともうれしかないのよ』と、彼女はつぶやいた。

『何が？』

『どこへ越したつて、どんなうちを持つたつて、私ちつともうれしかないのよ！』

――清はお君の顏を見た。

『私、うれしかないのよ――ちつともうれしかないわ。從兄さんとどこに棲んだつて、私には何の關係もないことですもの――』

清ははじめてお君の氣持をすつかり知つてしまつたのだつた。彼は彼女の愛を十分に知つて激しい滿足を感じた。

『じやあ、君は？』

と、彼はいよ〳〵きつく白い手をつかみ締めた。

『えゝ――若し私達が――』

『勿論、僕だつてそのつもりでゐるのだよ――でも、僕は君をひどく苦しめたくはないのだ。貧乏や何かで苦しめたくはないのだ――だからね、もう少し辛抱しなければいけないのさ。』

『私、どんな苦勞だつてかまわないわ、私かうしていつまでもゐるよりも――』

彼女も握り返した、二人の手はなか〳〵放れなかつた。

4

――お君は身を投げ出してかゝつてゐた。清はそれを知ると、彼のやうな內氣な青年にしろためらつたり、考へ込んだりばかりはしてゐられない氣がした。

『私は、何も望みはしなくなつてよ。たゞ從兄さんと何の目的もなく暮してゐるのは厭になつてしまひましたわ――どんなに苦しかつたつて、あなたと二人でゐられるなら何とも思ひはしないわ。』

情熱は彼女を雄辯にした。彼女がどんなにやさしく弱いをとめであるにせよ、望むだけのものを望まずにはゐられないのだつた。彼女は青春の曙に今立つてゐるのである。

『君がその決心なら何でもないよ――明日からでも、いや、今夜からでも、このアパアトへ來れればいゝのだ。』

『このアパアトへ！』

と、お君は目をかゞやかした。

――さうだ、もしさういふことが出來たらどんなに樂しいだらう――この部屋を出來るだけ住よく飾つて、情人が一生懸命仕事をしてゐる側で、自分も何か勉强しよう、この部屋は隨分

殺風景だけれど、女の手が加はれば、屹度もつと〳〵美くしくなるだらう。

『僕たちにまだ若いのだから、一家を急いで持つ必要もあるまい。このアパアトで暢氣に暮すのも面白いぢやあないか。』

『えゝ、私、從兄さんにさう言つて、出來るだけ早くよこして貰ふわ。』

彼女はさう話がきまると、急に元氣になつて、持つて來たアイスクリイムのことを思ひ出した。

『あゝ、溶けちまつたかも知れないわ！』

彼女は叫んだ。そして卓の上に投げ出してあつたアイスクリイムの鑵を取つて來た。

『何です？』

『アイスクリイムよ。』

彼女は鑵をあけた。清は棚をかきさがして、スプーンを二つ持ち出した。

『あなたたべてよ。』

『いゝえ、君も——』

『あなたに、買つて來たのだもの——』

すると、清は自分のさじですくつたのを、

『だつて君、毒味といふことがあるじやあないか。』と、お君の口に入れてやるのだつた。

二人はうつとりして幸福に醉つた。二人はひどくベタ〳〵する、甘たるい接吻を味はつた。

話はそれからそれへとつゞいてやがてまた默り込んだ。愛がおたがひに確認された以上は、うら若い二人はもつと激しい實證をのぞむべきであつた。二人の手さきはともすればからみついて、そしてベト〳〵に汗にまみれた。お君の胸はだん〳〵惑亂して來た、生れてはじめて知る世界が、おのづとしかし惱ましさの限りを持つて彼女を捲き込みはじめた。彼女はどんなに苦しくとも、いまはしくとも、その捲き込む力に反抗することは出來ない。

隨分おそくなつてから、清は彼女をタキシイで、本田の寓の近くまで送つた。しかし、わざと少し遠くで別れることにした。

『じやあ、從兄さんによく賴んで一日も早く計畫を實行するやうにしたまへよ。』

『えゝ、大丈夫よ。』

お君は、急にすべての恥ぢらひや見榮をなくしてゐた。彼女はかたく手を握り合はせてから乘物を下りて、思ひ切つて横町へ驅け込んでしまつた。

——清は翌々日の本田の移轉には、是非手傳にゆくつもりだつたが、仕事がいそがしいので

それも出來なかつた。彼にしてももう少し狀態をよくして一日も早くお君との同棲生活をはじめねばならないのだつた。清は一週間かゝつて中篇物を書き上げ、例に依つて藤島の手を經て金にして貰ふことが出來た。

清は當分あくせくと働かずともすむ身の上になつた。そしてこの機會をのぞいてはお君を迎へる時期がないのを思つた。

清はてみじかな手紙で、お君に概況を知らせ、出來ることなら本田に一切の許しを得て置くようにと言つてやつて置いて、越えて二日ほどして、はじめて荻窪の友人の家をたづねた。

青く茂つたたうもろこし畑の間にある、靜かな一軒家の小さな門柱に、本田といふ名札が打ちつけてあつた。

訪なうと、臺所の方で洗ひものでもしてゐるらしい水の音がしてゐたが、二疊の玄關へ出て來たのは、蒼ざめて、顎ひげをまばらにのばした本田だつた。

清は本田の窶れたかほを見るとびつくりした。

『どうしたんだね？　顏いろが惡いぜ。』

『イヤ、いつもの持病なんだ――夏喘息なんだ。』

本田は不機嫌さうに云つた。

本田の部屋には、寢床がしいてあつたが、主人は別に寢込むほどの病氣でもないので机の前に坐つた。

清は移轉のよろこびを云ひ、小さつぱりとした家を賞めた。しかし本田は、はかばかしい返事もしなかつた。

この男は何を怒つてゐるのだらう？

と、清は心に呟やいた。多分、移轉の手傳ひにも來なかつたし、それから無沙汰をしてゐるので、それを憤慨してゐるのに相違なく思はれた。清は多忙だつたことを話して、それとなくわびるのだつた。

しかし、本田の不機嫌は直らなかつた。

『いや、僕はそんなことはどうだつていゝんだ。』

と彼は吐き出すやうにいつた。

『友情も人情も、今の世で、そんなことを考へてゐる奴こそ馬鹿なんだよ。』

『君は何をいつてゐるのだね？』

と、清はびつくりして訊ねた。

『みんな色氣違ひさ。』

と、本田は憎々しげにいつて、またすぐに清を見た。

『さうだよ、みんな色氣違ひなんだ。友達の從妹を、何度も逢ひもせぬうちに、もう自分の方へ引つ張り出さうとたくらんでゐるやうな人間もあるからね。』

清ははじめて、臺どころにお君がたしかにゐるにも拘らず、こゝへ顏を出さないわけがわかつた。

それにしても、お君と自分との關係を今はじめて知つたわけでもない本田が、どうしてこんなに荒々しい目で自分を睨むのか、その心理を知るのに苦しんだ。

『僕がいそいでこの家を持つたのも、あの子にゆつくりした生活を味はゝせたかつたゝめなのだ――それが、この家へ來て、一週間とたゝないのに、もう僕を置き去りにしようとしてゐる――しかも僕が恰度持病をおこして苦しんでゐるのに――』

本田は胸をうごかして荒つぽく息をした。のどの奥がゼイ〳〵と鳴つてゐた。

5

『師匠も師匠なら弟子も弟子だ。』と、本田はゼイ〳〵と咽喉の奥を鳴らしながら、どこまで行つたら止るのか、果しのつかないやうな憤怒に追ひかけられて罵りつゞけた。

『藤島にしろ、君にしろ、ちよいと小綺麗な娘の子があらはれると、すぐに目の色を變へて追ツかけまはすんだ。そして相手がどんな淨らかな花でも、一度手に取つて匂ひを嗅ぐと、すぐにほつたらかしてしまふ。これが近代兒のやり方だと、犧牲の多いのを鼻にかけやがるんだ。だが、僕にはそんなことは關係はないんだよ――君は勝手にお君を持つて行くがいゝ。君に食ツついて行きたきあ、僕はあれを束縛はしやせんよ。』

本田が持病が起るとすぐにぢれ出して、だれにでも突つ掛つて來るのは、いつものことだつた。しかし、今日の彼の言葉は、あんまり毒々しくもあつたし、下卑てもゐた。大人しい清も腹に据えかねるやうに思つたが、こゝでこの友達と爭つてしまつては、立場のなくなるのはお君だつた。彼は出來るだけ緩和策を講じる外はないと思つた。

『じやあ君は、お君ちやんに僕が書いた手紙のことでおこつてゐるんだね？』と、彼はしづかにいつた。

『僕はまた、あの手紙は君によろこんで貰へるにしろ、おこられはしまいと思つたのだよ。僕が決してあの人を一時の友達のやうに考へてゐるわけでないのを、君も知つてくれるだらうと思つたのだ。』

――清はさういひながら、たつたひとつの怖れにとらはれはじめてゐた。ことに依るとうは